
ONE PIECEの世界で生きて行きます！！

亀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ONE PIECEの世界で生きて行きます！！

【Nコード】

N3234N

【作者名】

亀

【あらすじ】

普通の女子高生だったのに、神様の流れ弾によってワンピースの世界で転生することになった。さてさてこの子の運命やいかに！！この作品は作者の暇つぶしによって作られたものです。更新が不定なので

注意してください。

プロローグ

あゝ、何でこんなことになったんだろうね

いま、わたしは、自転車にはねられ、なんかで~~~~~つか
い火の玉飛んできて丸焦げですw

なんか悪いことしました？

こんな平凡すぎる高校生がなんかしましたか？
神がいるのならわけを聴きたい。

(ごめんよお)

あら？いつの間にか真っ白な空間にいるな。
頭の中で声がするし・・・

(わしゃ、神様といわれるものですな。)

つて・・・神様！？

なんでそんなものがここに

(わしがここのいたらだめかね？)

人の心を読んだ。きもっ

(きもいとはなんじゃ、きもいとは)

いやゝ、そんなことどうでもいいんですけど、何で私はこんな運命
に？

(いやゝたまたま、わしが暇つぶしに火をおこしてな、その火が手

が滑ってしもうて)

ふってきたと

(そのとうり)

って、あほか!!

(すまん、その代わりといったらなんだが、他の世界に転送+五つ願いをかなえてやろう)

おお、神様すごい

(どこの世界でも、どんな願いでもよい)

んじゃあ

ワンピースの世界で

1つ、世界一美人

二つ、ペットとして龍をつける、ちなみに額に十字架いれてその中に普段は入っている

3つ、霸王色の覇気

4つ、魔法が使える

5つ、運動神経、頭のよさ、回復力が人の5000倍

5歳くらいで転送してね!

(おもったより、こいつすごいこといいよるな)

さっさとしてね

(その前に、お前のあっちの世界の名前を決めろ、)

んじゃあシェルティで

(はいよ、じゃあ。転送)

どさ

あっけなく行きましたね。ここは、ああ、ワンピースの世界か・・・
どこだろう、ってか着地したとき痛かったな。

「お、おきたのか。」

ここは、船の上？でもちっさー！

「おれは、フィッシャータイガー。おまえは？」

あ、そう。大物なのね。

「わたしは、シェルティ。で、どこへ向かっているんですか？この船は。」

「おりるか？」

「いいえ行く当ても無いので」

「いあ、これはうそ。だって私この人とマリンフォードで奴隷解放したいモン」

「あ、龍の名前どうしよう。清流でいいか。」

「今奴隷解放のため、マリンフォードに、向かっている」

「連れて行った下さい」

「お前は未だ子供だろう？」

「あゝ、そうか、そうだったね。私は五歳の女の子！でも、わたしには龍というおくのてがある！！」

「龍を出せます。」

「うそを言うのではない。」

「出そうか」

「出したら連れて行ってくれますか？」

「ああ。いいぞ。」

「えゝと、呪文は……」

「勝手に作るか……」

「あまたをかける龍よ、わたしの龍よ、今、呪縛を解き放ち、私の前に現れよ！！」

「光が額の十字架から出て、だんだん龍の形になっていく。」

「でた。」

「なまえのとうり青色で、くりくりの青い眼で、額に私と同じ十字架」

がある！

でも、ちっさ！！

「本当のようだな。」

「連れて行った下さい」

「わかった。しんでも知らないぞ。」

「しにません。」

「ははは」

もう。

マリージョアにつきました。

いま、レッドラインの前です。

さあ、私は清流に乗って、フィッシャーさんは、素手でいきますか。ちなみに清流に「おおきくなあれ」っていったら、大きくなりました。一般的な龍ぐらいの大きさに。

ズザザザザ

はえゝ、フィッシャーさん。

さすが魚人族。一時間ほど経過して、つきましたね。

「俺は奴隷を解放する。おまえは邪魔になるだけだ。それ、しまつて、隠れときなさい」

いがいに優しい(?)のかな？

「私は天竜人を倒しますねw」

「おいっ!!」

「んじゃあ〜り〜が〜と〜うご〜ざ〜い〜ま〜し〜た〜。」

幼稚園児みたい言っ去って行く私。

天竜人現れました。そして、堂々と横切る

天1「おい無礼者。私の前を横切るな!!殺せ。」

「うざっ」

天1「ぶぎゃあ」

今のはただの回し蹴り。しんだね。ふ、ざまあ

見たいな感じで悪そうなのを次々と倒していくわたし

奴隷はかぎ作って渡して開放

立派にお掃除してるでしょ?

あ、海兵さんもね。

ちゃんと致命傷になるくらいのキズ負わせといたから。

大丈夫!抜かりはなし!!

あれ?あこの天につれられてるのって(天は、天竜人の略)
ハンコックさん?

「ふふふふ」

助けて恩を売っておこう

s i d e ハンコック
もういやだ。

ここに居たくない。
だれか、助けて!!

「おゝい、その天竜人というカス!!」

このこ!!なんてことを!!

「ああゝん?ころせ!!」

「はあ、分かってないね!」

ふぎゃ

あ、警備の人がしんだ

「ひっ」

「奴隷さゝん。これで逃げて!!」

もらったのは、鍵。

「あなたは!!」

ふいに声をかけてしまった。まだ、五歳くらいの女の子に何であるの
が倒せるの?

「あたし?あたしは、シエルティ!弱気ものをいじめるひとを刈る
のが趣味!」

「あ、ありがとう」

「どういたしまして。」

あのちいさな子に助けられて正直しつくりこない。でも私は忘れない。シエルティ、あなたのことを

sideシエルティ

あのねえ

「海兵サンよ。そんなに五歳の女の子をいじめたいの？よってたかって切りかかってきて。まあ、斬られたってどってこと無いんですけど。よけるし。」

『『『『『『『『『『『『くつ』』』』』』』』』』』

「ええい。わしが行く。」

「『『『『『『『『『『『『た、大将！！！』』』』』』』』』』』」

え、あの。女の子相手に大将って無いんじゃないですか？

「うええええええええええええん。かいへいさんがいじめるよ〜」

必殺！噓泣き！

「シエルティ、そんなこと出来ないのに〜助けてくれたおねえちゃんのまねしただけなのに〜」

そして、いいわけ！！

「そうかそうか。って、だまされんぞ！！」

ちっ

「しょうがないですねえ。」

いま思いついた技出しますか!!

「凍える涙!!」

吹雪を起こす技だよん

「でいやあ」

切りかかってくる

「熱く燃える心!!」

火の玉を投げる技

「はっ!!」

斬りよった。

「ば、化け物がおる」

「お前のほうだろ!!」

「鋭い眼」

雷を落とす業

「うわあ」

あつたつた!!

「速い翼」

竜巻です。

「凍える涙、熱く燃える心、鋭い眼、早い翼それは人間が持つてい
るなり!!」

光る龍を召喚して相手に噛み付かせる技です。

はい、大將はからだ
私は魔力が限界です。
どーしましよどーしましよ

「逃げるが勝ち!!」

にげるゝにげるゝわたしはゝまわりゝのものの破壊しゝてゝ

あ、奴隷さんたち各自船に乗って逃げてるし！
わたしはゝあゝゝあれにしよと。

わたしはレッドラインからその船に飛び降りた。

「きゃっ」

お、なんとまあ蛇姫さんのとこジャーないですか。にょん婆も乗ってるし。

「あなたは!!」

「どうしたの姉様」

「だれこいつ!はっ!まさか政府の回り物?」

「だれじゃこやつは」

口々に言い寄って。

「わたしは、シエルティ。この事件の張本人であり、この黒髪の女の人を助けた人!」

「「「はあ?」」」

「そうじゃ」

蛇姫さんだけうなづく

「「あ、姉様を助けてくれて有難う御座いました」」

「うん」

「あ、あの!!」

「なに?緑の髪の人」

「あなた年はいくつですか?」

「5歳」

「「「ええええええええええええ」」」

ああ。おどろいてるおどろいてる

普通の反応有難う

大将さんしてくれなかったもんね

普通に斬るし、まあ、もう死んでると思うけどね

そして蛇姫たちは思う

（（（（シエルティって、なんか常識超えてる））））

まあ、転生したし

てか早く自分の姿みたいなの

ハンコック「シエルティって今からどこ行くのじゃ？」

シエルティ「えーっと。姿隠すためにフーシャ村でもいこつかな
つて。」

「「「「とおいな」」」」

シエルティ「いあ1時間あつたらいけるから。えーっとなんかこの
格好隠すものあつたらくれないかな？」

ハンコック「送らなくてもいいのか？」

シエルティ「大丈夫大丈夫。」

ニヨン婆「マントなら一枚あるニヨ」

シエルティ「もらえるかな」

ニヨン婆「いいがニヨ。お主何者じゃ？」

シエルティ「だあから。普通の五歳の子供ですよ？」

転生したなんていえないし。マントってどんなんだろうか・

シエルティ「マントってどんなものなの？」

ニヨン婆「これによ」

きれい。真っ白で裾や、袖口に雪の結晶の模様が入っている。

シエルティ「これほしいな。」

ニヨン婆「まあいいが。」

シエルティ「やったあー!!」

よし。もらったし、着て、そしてフーシャ村に行こう!!

シエルティ「マンとありがとね。んじゃ、またどこか出会おうね」
「「「「「ああ「「「「「

さあ、清流に乗っていざ。フーシャ村へ!!

プロローグ（後書き）

えつとですね。めちゃくちゃですね。この文。あとキャラが崩れの
かもしれないのでご注意ください。
でも、私を見捨てないで

フーシャ村について

side シエルティ

今ね、海の上を清流で飛んでるよw
いやゝはやく私の姿みたいなゝ

ついたね。

うん。名前のとおり風車がいっぱいあるよ。

「おい。エース!! 勝負しろ!!」

「だめだ。」

「なんで」

「もう、一日の勝負する数すぎただろ？」

おゝおゝやってますね。

あいつら手なずけるか・・・

「おい。その人たち!!」

「?」

「ちよつと。宿屋探してるんだけど・・・」

「それなら「おい!ルフィ!」。」

ふふ。なかいね。

「お前誰だ?」

「私はシエルティ!!あなた達は?」

「俺はエース。」

「俺はルフィ。」

「よろしくな。」

さすが義理兄弟ハモってる

「こちらこそよろしくね。」

「ところでお前にもんなんだ?」

え、見破った?ンな分けないか。

「普通の女の子だよ?」

勘が鋭いな。このエースさんは。さすがゴールドロジャーの息子!!

「だったらなんで龍から降りてきた。」

いちいち鋭いな。えーつと、こつゆうときは。スルー

「それよりも宿屋ってどこ?」

「「宿屋はねえ」」

・・・

宿屋ぐらいあるでしょ。

んじゃあ、いいや、もう。こんなあてにしなければよかった。

「んじゃ。情報有難うね。」

「おい！待て！！」

おいおい

ここはほつとこうね。エースさん

「なにかな」

「教えてもらってそれは無いだろう。情報料払え。」

エースってこんなキャラだったっけ？

まあいいや。はしって逃げよう。

「んじゃ。」

ズダダダダ

土けむりをたてながら軽く走った。

フーシャ村らしきものが見えてきたぞ。
そのバーみたいなのに入ってみよう

「いらつしやい!!」

美人な人がいますね。

「あら？見かけない顔だね。」

「はい、えつと、とおおおおおおい所から流されてここに流れ着いたんですけど。ここってどこですか？」

「フーシャ村よ。」

「あの」

「なに？」

「私、新聞見たいんですが……」

「えっ……いいよ。」

そうだよね

おかしいよね

こんな小さな子が新聞見たいなんて……

とかおもいつつ新聞めくると

マリンフォードの奴隷解放事件!!

そうぜい5537人の天竜人を殺し奴隷を解放した。フィッシャー

タイガーとシエルティ。

おーおー

もうこんなとこまで情報きてるよ
懸賞金とかアンのかな？

「おねえさん。賞金首の紙みしてくれる？」

「ええ、新聞は読み終わったの？」

「うん！。」

「そう」

渡してくれた。賞金首の乗った紙。

違和感なんて沸かないのかしら？

まあ都合がいいから言わないけどね・・

えーっとわたしのあるかな？

・・・粉雪のシエルティ懸賞金6億ベリー・・・

海軍バカかしら？

こんな子供一人にこんなけかける？普通

「お姉さん。」

「なに？」

「この子どうおもう？」

「どのこ？」

「粉雪のシエルティさん」

「そうね。こわいかしら。」

「そうなんだ。」

怖いんだね、やっぱ。

そりゃそうか。

こんな子供がたくさんの人を殺したなんて・・・
ばらしてみようかしら？

「私、鏡みたいの。もし、このシエルティ見たいな顔だったら怖い
もん！！」

「わかったわ。こっちにきて。」

「うん」

さあ、どんな顔なのかな？

「ここよ。」

「おねえさん。かぎしめて。誰もこれないように、もしシエルティ
だったら大変だもん！知られたくないし。」

「わかったよ。」

さあ、マントをとりますか。

「お姉さん。私の名前はシエルティだよ。」

「！？」

そりゃ、びつくりするよねえ
まあいいか

「その証拠に・・・ほらね。」

「！！！！！！」

ビククリして声も出ないってか。
まあ、しょうがないけどさ。

「私をどう使用っての？」

「いあいあ。よんなつもりはないよ。ほんとにどんな顔なのかみたかっただけだし・・・」

「信用できないわ」

「なら、縄で縛ってもいいよ。信じてくれるなら。」

縄なんてどってことないし

「わかった。信じる。」

「うん。ありがとう。」

さて、どんな顔なのかな？

・・・

え、えーっと

髪の毛が絹みたいに白くって腰まであって、眼がルビーみたいでくりくりで、すこしピンクっぽい白い肌です。

うーん。かわいいのかな？

「ありがとう。自分の顔が良く分かった。」

こりゃフードかぶらなきゃだめだね。

「ねえ、シエルティちゃん」

「ん？」

「ルフィー達と手合わせしてくれるかな？」

「なんで？」

「あの子達を誰にも倒されないように強くしてほしいの。」

「わかりました。」

たぶんあいつら私を追いかけてきてると思おうから。

「よんでくるね。」

「はい。」

「エース！ルフィー！！おいでー」

「はい」

ええええええええええ

よんな簡単にくんの？

キヤラ崩れまくりじゃん・・・

「「ああっつおまえは」」

「はあゝい」

「このこと手合わせしてみて。二人係で」

「「なんで！！」」

「わたしは賞金首だし」

「「！！」」

「賞金首と手合わせしたいでしょう？」

「「おう」」

「んじゃ決定ね」

さあ、お遊び開始

フーシャ村について（後書き）

キャラが崩れるゝ

ガラガラガツシャーん

ああゝこんな私と小説ですが見捨てないでね

対決

side シエルティ

あゝそういえば、こいつら最初手なずけようと思ったんだっけ？
ま、いつか。今は遊んでやればいいんだし

「お姉さん。最初に私のペットと戦わせて見たいけど、いいかな？」
「いいよ。」

「おいシエルティなめてると痛いめにあうぞ。」
「そうだそうだ。」

はいはい。わかりましたわかりました。

「んじゃあ、改めて粉雪のシエルティ。懸賞金6億べりー。ですよ
ろしくね！」

「ええええ！！！」

「さあ、あまたをかける龍よ、私の龍よ、今ここに姿を現せ！！清流
流！！！」

「「「おおおお」」」

「おおきくなあれ。」

はい巨大化

「清流この子達と遊んであげて。」
『わかった』

「もうはじめていい？お姉さん。」

「・・・え、どうぞ。」

「「「すげえ」」」

キラキラキラ・・・って、あゝあ
まあいいや

「清流。いつてきて。」

『はいよ』

「「ふ、後悔するといひぜ。」」

エースは飛び掛っていつて、
ルフイは、腕を振り回している。

「ゴムゴムのピストル!!」

変な方向に繰り出すな

「どりゃ」

エースは殴りかかる。が、びくもしない。

『若造よ甘いな』

清流羽で風を起こす。エース達、飛んでいく、そして、気絶

「やりすぎ!!」

『すまない』

「小さくなあれ」

小さくなつていく清流。

「この勝負私達の勝ち!!」

「・・・」

さてと、起こしに行きますか

s i d e ルフイ

つ、つえ

二人係でもたおせ無かった

傷すらも負わせレナカッタ

じっちゃんでも負けるかな・・・

あいつ、気に入った。

海賊として海に出るとき、俺の船に乘せていこう!!

それまでに、あいつを越さない・・・

s i d e エース

お、俺が負けた。

あんな、女のペットに

もしかしたら女は弱かったりして、

もう一度勝負だ！！女の方と

そうと決まれば・・・側行動！！

s i d e シエルティ

はい。いま、清流に乗って、エース達を起こしにってます。

いやー。どこに落ちたんだろうね。

うーん。あ、なんかくぼみがある。

いってみよう。

あ、いたいた。

起きてますね。ってそれぞれ別の方向へ……………っておいおい。し
やーないな

「おい。エース達」

「「あ、おまえ！！」」

いちいち八モるな！！

まあいい

「乗せてくからそこにいてね。」

「乗せてつてくれのか！！」

目がきらきらなルフィ

「お前勝負しろよ！あとで！！」

エース。

おいおい、骨折ぐらいのケガ覚悟しなきゃな。私、まだ制御できてないからな。

後で伝えておこう

はい着地。乗せました。

町に到着。

「勝負しろよ！！」

と、エース

「いいけど。骨折ぐらい覚悟してね。」

「へっ、いい気になっているのも今だけだぜ。」

そっちがつつーの

つまあいいか。

さっさといこうか

「んじゃいくね。」

「おう。」

「凍える涙!!」

エースカチンコチンです。

「あちゃちゃ。解凍しなきゃ。」

とりあえず。海につけて、あ、もちろん抱えてね。

「おまえ、エースをよくも!!」。

「はいはい。今手当てしてるからこれ終わってからね。」

対決（後書き）

さてさて、エースはどうなるのかな？

ガープを次ぎだしますね

感想、評価をください

友達認定！？

side シエルティ

はあ、やっとちょっと解けてきた。
あと少しだね

「お前エースをよくも！！！！ゴムゴムの〜ピストル！！！」

パシッ

つかんでエースと一緒に海につけた。

「おぼれるウ。」

「つかんでるからおぼれません！！！」

「お前！！この！！！」

「いい加減にしろ！！！」

「・・・。」

ふ、所詮は子供。脅しだけで黙り込んだ。
はあ、疲れるなこの二人といると・・・

「ぐ・・・うあ・・・。」

「あ、目が覚めた？ごめんね？ちよつとやりすぎた。」

「お前、何で本気でやらなかった！！！」

「あんた、私本気でやったらこの島2秒ぐらいで消えるよ？」

「うそをつけ！！！」

「やっただけようか？」

「ぐっ・・・。」

あ、ホントは一秒かもねw
冗談ではなくね。

「おい、シエルティ！」

「何？ルフィ？」

「俺と勝負してお前が勝ったら俺の友達になれ！」

は？

普通反対でしょう？

あんた頭どうかなってるって

「普通反対でしょう？」

一応突っ込んで

「だってどうせ勝てないし。」

うわ、こいつ以外に頭いいのか？

「普通に勝ったって面白くないし。」

ちょっと待て、お前先といってること真逆まんですけど

「どうでもいいけど、こんどは骨折しても知らないよ？」

「俺に打撃は通じない。よって俺が勝つ。」

「はいはい。」

「んじゃいくぞー！」

ルフィが、ゴムゴム……じゃないの？

普通の打撃できた。

ほえ

予想外。

ま、私のほうが一枚上手だけだね

ぎりぎりのところで避け

私が腰に蹴りをいれる。

撃沈

「ごふう。」

「打撃は効かないんじゃないの？」

「何でこんなに、ゴハア、つええんだ？」

「私は、うん、まあね。」

「負けたんだしよ。ほら、友達だ!!」

「あ、うん。」

「俺もな。」

「「エースも?」」

「なにその反応」

「「まあいいけど」」

「まあ友達として、どんなことが会っても、どんなに遠くにいても危機が着たらこの笛で知らせてね?」

そう言って穴が開いた玉を渡す。あ、ピンポン球くらいのだからね

「どうやって使うんだ?」

「こうやって、この穴にフーって息を吐くと。」

「「玉が熱い!!」なんてだ?」」

青い玉が赤く変化して熱くなった。

「これで分かるでしょ？」

「どこで手に入れた！！」

まさかなあ

移動しているときに、戦ってできた火傷や青たんを取って合わせたものだとはな、いいにくいしな。

まあ、適当に作って話すか

「私が住んでいる町にガラスを作っているのがあってね？そこでつくった。」

「へえ〜。」

あつさり納得する？普通。

しないよねえ

まあ、いつか。

友達認定！？（後書き）

いかがでしょうか

シエルティ「だめに決まってるじゃん！！」

亀「なっ！！はつきり言うな！！」

シエルティ「それよりも、他の作品もちゃんと更新してるの？」

亀「・・・まあいいとして次回はシエルティちゃんに恋をしています。もらいます。」

シエルティ「だれと？」

亀「ひ・み・つ。」

シエルティ「殺すぞ！！」

亀「ふええゝお助けをゝ次回で分かるからゝそれ引ッ込めて！！」

ということでご期待！！

シエルティ「そんな見るやついないだろ（ボソッ）」

亀「！！ガーン・・・・・・・・」

恋する・・・

友達の契約(?)から10年後・・・

side シエルティ

はあ

暇だい!!

いまだに

凍える涙

熱く燃える心

鋭い目

速い翼

それは人間持っているなり

しか、思いつかん!!

あ、その自然バージョンもいいかも

「暗い緑!!」

おお

一面につるが延びてきた。

意味は、緑が暗くなるほど「燃えて灰になる」人間で、まあ意味わかんないと思うけどね
このつるは人間しか絡みつかないの

「苦しむ草!!」

お、これは

地面に穴が開いてその中に液体が入ってて

ジュー

木を入れたら一瞬にして溶けました。

つまり、食虫植物の中に入っているやつ？

なんも匂いしないけどなあ

「増える実！！」

なんか実がたくさん出てきて、それで

バシユ

つとぎつたら、斬った分だけ増えるは増えるは

使うほうも気をつけねば

あと、中からなんか足がたくさんある真ん丸いやつが……
以外にかわいい？

「吸い取る荒地！！」

えーつと、これは

まあ、あり地獄みたいなの？

なんか針山みたいなものがあるんですけど……
やだわ

んで最期の決めセリフ

「それは自然が持つものなり！！」

緑のでつかい鳥が出てきて相手に（このときはあらかじめ創っておいた人形）ちっちゃい石を光の速度で
投げつける

・・・

おそろしい

と、まあ創ってみたわけだけでも、

この技いろいろと危ないね。

本当に危機に直面したときだけ使おう

ともあれ多少なりとも暇つぶしはできたかな？

腕にしてあった時計をみる

開始時間が1時だから・・・

いまは一時十分なわけで・・・

ホントに少ないけど暇つぶしできたね

ホントに少ないね。うん。

さて、きょうは、海岸に行って海王類つりでもしてお金かせごうな
か？

よし、いこう

ただいま海岸前

エースが神妙な顔をして海岸にいます
声かけずいね

「シエルティ……」

「呼びました？」

「うおあ。」

おーおー

あからさまにビックリしてどうする
お前がよんだのにね

「で、なんのよう？」

「なんでもねえ。」

「そう。」

私は海王類つりをする

ヒット!!

この世のものではない力で引っ張る

上手につれました」

さあ解体して保存食にしよう

私は腹をさく

そしていろいろなものを創る・・・といっても保存用食料の袋だけだね

皮は服にしたり、靴を創ったり、帽子を作ったり・・・肉は地道に半分焼いて後で食べるよう、半分は干して保存用

その工程を見ているエース。ビックリしている

「なあ。」

「ん？」

「よくそんなことできるな。」

「海に生きるものとして当たり前でしょう？」

「・・・俺できねえし。」

「まあ、できなくても生きていけるけどね。」

「なあ。」

「ん？」

「お前好きなやついるか？」

「何をいきなり。」

「いるか？」

「いないけど？」

「・・・う。」

「？」

「なんでもない。」

「へんなやつ。」

sideエース

俺は海を見ながらがんがえていた

あゝくそ

むしゃくしゃする！！

寝る前には必ずアイツの顔が浮かぶし、

何してもアイツのことが気になって集中できねえ

こんなのになったのはあいつに倒されてからだ

俺が凍傷になったのを戦いで敵なのに看病しやがった。

あのときの真剣な表情、俺が気絶して意識が戻ったときのあの笑顔

くそ、あんどき抱きしめたかった。

こんな思いは世間ではたぶん恋を言うのだろう

まさか俺がなるとは思いもやらなかったぜ

でも、あいつも俺の流れている血をしつたら俺から離れていくだろう

そんなのいやだ

これが報われない思いだとしても

なっちまったな

くそ、こんな思いをさせたのも、あいつ、シエルティだ

他愛ない会話をシエルティとしてる

何でこんなに嬉しいんだ？

やべえ

俺がおかしくなっていく

ために聞いてみるか？

「お前好きなのやっいるか？」

「何をいきなり。」

「いるか？」

「いないけど？」

「・・・・・・う。」

「？」

「なんでもない。」

「へんなやつ。」

いないのか

なんか複雑な気分だな

いないって聞いて、よかった。俺のことは好きじゃないのかって思
つてがっかりする自分。

はあ、どうしちゃったんだ？俺・・・・・・

恋する……………（後書き）

いかがでしょうか

シエルティ「あたしじゃなかったのか？」

亀「誰かさんに変えてみました。」

エース「おい！亀」

亀「ひいひい！！」

エース「ボソ…………俺とシエルティをくつつけさせる。」

シエルティ「なんていったの？エース？」

エース「今後の企画についてだなあ、ちよつと…………。」

シエルティ「わたしにもまぜてよう。」

こんなかんじです

さてさて、エースの思いは通じるのか！それとも見事な片思いで終わるのか！

意外なことが多すぎて（前書き）

あゝもうめちゃくちゃだゝ

どう書けばいいのかわかんねゝ

意外なことが多すぎて

side シエルティ

いま、海にいます。

エースと、ルフィと一緒に

ここに蛇姫がいたら思いがけないほどの殺気が来るな。ああ、こわい

「シエルティ、お前ってどこからきたんだ？」

「聞くだけ無駄だと思うよ？エース。」

「俺も聞きてえ。」

「ルフィまで。」

「いいじゃねえか。」

「その代わりあなたたちの過去も教えてね。」

「おう！」

はあ

「私は異世界から来たの。」

「ふーん。」

「ええっ！！！すげえな！！！」

思ったより反応薄！！

あと、普通は疑わないわけ？私のこと

「んで、その世界で神からの流れ弾を食らって、死んで、そして能力もらってコッチにいますと、そんなかんじだよ。」

「なんか、すごいな。」

「っすげえ！！！！」

・・・

何でこんなに反応薄い？

普通はもつと驚くはず・・・

器でかいな

そして、ルフィとエースも自分の過去をはなす

「シエルティ、ゴールドロジャーの息子の俺をどうおもう？」

「どうもこうも血筋って関係ないと思うし、今のエースは、エース以外の何者でもないし、特別な扱いなんてしないよ？」

「また・・・。」

？

普通でないかな？

てか、差別ってバカのこと！！

なんかエースの顔が熱いし、ここはお約束の

「熱でもある？。」

「ハアハアハア・・・。」

ピト

えーっと、うん。

40 らへん

やばいじゃん！！

熱あつたし！！

お約束も本当ってこともあつたんだなあ

まあ、看病しますか。

とりあえず、このことを伝えよう

「ルフィ。エースに熱がある。」

「ええっ!! ああどうしたらどうしよう。」

予想道理

ここは落ち着かせよう

「まあ落ち着いて。今直すから。」

「えっ!! なおせれるのか! よかった。んじゃ速く直してくれ。」

はいはい

わたしは、体から熱を取るため、エースの一番熱いところ(むね)を触って

「なおれ・・・。」

そっいつて、エースに口付けをする。

「??!!。」

「あ、気が付いた? ごめんね勝手にしちゃって・・・。」

「いや、べ、べつにいいんだが・・・。」

器でか!! 心広!!

私だったらなぐってるのになあ

あれ? ルフィが、してほしそーにコッチを見てる

「俺には?」

「なんで?」

「ずるいじゃんか! エースだけ!!。」

「お前は熱でてねえだろ!!。」

「いいじゃん!!」
「よくない!!」

(実は、ルフィも、エースと同じことお考え、思っているのですた。
by 作者)

「私は別にいいけど?。」

キスぐらい、べついいけど?
後で、エースにもルフィにも、代金請求するけどね

「んじゃあ。」

「あいよ。」

「俺は認めねえ……。」

「もうやっただけど?」

「!!。」

「これで境遇は同じだな、エース。」

「くそっ」

「?」

ま、そんなことはどうでもよくて

「代金……」

「? なんのこと?」

「キスの代金一万ベリーね!。」

「たかつ」

「女のキスはこんなもん!! あ、一括払い。」

「しゃーねーな。ほら。」

「金がー。」

「まいど。」

私って腹黒だな

意外なことが多すぎて（後書き）

いかがだったでしょうか

シエルティ「エース最近なんか変だよ？」

エース「なんもかわってねえよ！！」

シエルティ「そう？ならいいけど。」

感想・評価・お気に入り登録など！！
やってくれたらありがたいです。

フーシャ村、去る

side シエルティ

エースが、17歳になり、海へと旅立つ日です。
あ、ちなみに今、誰もいない海岸にいます。

「シエルティ……。」

「なに？」

「俺……。」

「頭いたいのか？」

「んなわけないだろ!!」

そう。

で？何のようなのかな

「俺、お前のこと」「エーーーーー……スーーーーー……。」「」

「お前のこと?。」

「くっ、なんでもねえよ。」

なにそれ。

人呼んどいて……

まあ、私も言いたいことがあるんだけど……

「エース。」

「な、何だ……?。」

「これ、一年分の保存食と、水と、調味料と、……。」「

「あ、ありがとう。」

(空気読めよ!!!お前)

あ、頭の中で声が……

って、たぶん神だろうなあ……

(悪かったな、神で)

で、どう空気読めって？

(このタイミングで、普通は好きとか、行かないで、とかいうだろ!!!)

なぜ？

(はあ~~~~~)

何が言いたいんですか？

(もういいわ)

なんなんだ!!

どいつもこいつも!!!

「シエルティ、俺お前のこと……きなんだ。」
「きなんだ?。」

なにそれ

「だあかあら、好きなんだってば。」

「はあ!?。」

「好きなんだって。」

「友達のないみで?。」

「性的な意味で。」

「……どう答えれば。」

「今思っている気持ちを言って。」

気持ちかア

普通

なんていえるかああああ

「好きか嫌いかで。」

う~~~~ん

どっちかといえば、好きだけどさあ
ま、いつか

「どっちかといえば好きだよ？」

「。。。。」

「おーい？エースさん？生きてますか？」

「生きてる。。。。」

そこはちゃんと言うんだ。

「シエルティー！！約束しろ！！俺が白ひげ倒して世界に名をとど
かせたら、結婚しろ！！。」

「んなむちな。。。。いいよ。」

「おし！！んじゃ行ってくるからな！！。」

「はいはい、いつてらっしゃいませ。私は、ルフィといくからね。」

「。。。。なら俺にキスしろ！！。」

「一回につき出世払いで、私の懸賞金の値段ね。。。。」

「ろ、六億。。。。」

「できる？。」

「出世払いな！！。」

「はいは。。。。」

言い終わる前にするなつての！！
あとで請求書用意しよう。。。。

「エーーーースーーーー！！！！なにやってんだーーーー！！。」

「キス。」

「おれも。おれも!!」

「六億だぞ？」

「いいからおれも!!!。」

「はいはい。」

「やったああああ。」

請求書追加

「そろそろ出港したら？」

「そうだぞそうだぞ!!!。」

「私も、いろんな町行こうつと。」

「ええええええ？」

「いいじゃん」

「お前は俺と行くんだ!!」

「こんなことまでそろわんくていいわ!!!じゃ、行くね!!」

「ああ、まって」

「さーよーなーらー。」

「おい!!」

こうして私はフーシャ村を去った。

フーシャ村、去る（後書き）

エースめっちゃ積極的！

いまさらながら、シエルティの今の姿しよっかい

白い髪は、ひざまで伸びてて、体形は、蛇姫並み！！顔は知性的だけど、どこか優しい感じの顔

一回なってみたいな！シエルティに

感想・評価・お気に入り登録などよかつたらしてください！！
兄に勝ちたいので・・・

なんかちゃっかり……

side シエルティ

あゝ

ルフィと一緒に行くはずだったんだけどな

ま、いつか

どこ、いこつかな

あ、ニョーガ島？ 的な感じの島あったよねえ
いつてみよう。

たぶん蛇姫いると思うし、あと、マントのお礼もしなくちゃな
どんなのがいいかな？

やつぱ、蛇姫の女の子だし、甘いものの好きかな？

よし！

トリユフをつくらう。

えゝっと、下準備

センター用のチョコレートは、細かく刻んでボウルに入れておく。

まな板の上にオープンシートを敷いておく。

コーティング用のチョコレートは細かく刻み、ボウルに入れ、約
50〜55 のお湯で湯せんにかけて溶かしておく。

絞り袋に丸口金をセットしておく。

ガナツシユを作つて冷やす

1・生クリームを鍋に入れ、中火にかけ沸騰直前まで温める。刻んだチョコレートを入れたボウルに一気に注ぎ、泡立て器で混ぜ合わせる。チョコレートが完全に溶けてなめらかなクリーム状になるまで混ぜる。

2・お好みでラム酒を加え、混ぜ合わせたらそのまま涼しい所に置いて冷やす。時々ゴムべらでかき混ぜながら絞れるくらいの固さ（混ぜるときにもったりとするくらい）になるまで冷やす。

3・丸口金をセットした絞り袋に「2」を入れて、オープンシートを敷いたまな板の上に棒状に太さを均一に絞り出す。

絞り袋がない場合は、トリュフ1個の大きさにスプーンですくつて落とす。

4・そのまま冷蔵庫で15〜30分冷やす。

ガナツシユを丸める

1・冷蔵庫で冷やしたガナツシユを、包丁で大きさをそろえて切る。

切りにくい場合は、包丁を温めて熱で溶かすようにして切るとよい。

2・切ったガナツシュを、手のひらで団子状に丸める。

手が温かすぎるとどんどん溶けていきます。手は冷水などにつけて冷やしておきましょう。

ガナツシュにコーティングする

1・コーティング用に溶かしたチョコレートを手につけ、丸めたガナツシュをコロコロと手のひらで転がしてコーティングする。

2・コーティングしたガナツシュを、バットに入れたココアの中で転がして、表面にココアをまぶしつける。

です。

あれ？何でしってるんだろう。

まあいつか。

お！島がある！！

ここで食料調達しよう

とうちゃくく

ん？

なんか音が・・・

「ベルメールさん！！」

あゝ

ナミのか

ココヤシ村だったっけ？

「大好き。」

あゝ

撃たれるやつか

と、考えてる間に勝手に体が動いて

「死ね・・・。」

あ、殺しちゃった？

ま、いつか

「ベルメールさん」

「ノジコ、ナミ」

「わあああああ」

ま、ハッピーエンドかな

つて、チョコチョコ

「お取り込み中スイマセン。ここってチョコとか売ってますか？」

「あ、はい。」

「どこに売ってますか？」

「あ、あこです。」

「ありがとうございます。」

「「助けてくれてありがとうね」」

「どういたしまして。」

ちやつかり謝ってるね

いい子達だわゝ

とまあ、成り行きで助け、チョコもちゃっかり調達したシエルティでした。

「あ、名前聞くの忘れた。」
という、ベルメールさんの発言があつたとか無かつたとか・・・

なんかちゃっかり・・・（後書き）

ほぼトリユフの説めーしかしてね
ははは

笑うしかないな

ということですが

次もよんでくだされば光栄です。

ニヨーガ島での出来事

side シェルティ

いま、清流の上で調理中……

良い子はまねしないでねwあ、まねできないか
創ったので冷蔵庫……なかったな、そっぴや
つくろっか……

こういうときは、異空間をつくろっ。

作り方は気にしないで

つくりました。

そこにおく、湿度もなぐんも無いので腐らないはずです。

つきました。

ニヨーガ島です。

「お~~~~い。だれかいますかあ？」

「「「だれだ!!!!」」」

「お、きたきた。粉雪のシェルティです。」

「「「……（賞金首がなのっていいのか？）」「」」

「蛇姫にあわして。」

「蛇姫様のおなぐり。」

「「蛇姫様が帰ってらっしゃったの？」「」

「んじゃ。かつてにはいつとくね。」

「「まちなさい！！」「」

「まつもんか！」

と、まあ声がした広場に行きました。
つきました。

「だれじゃ、童の通り道に子犬を置いたのは。」

ガツツと、こ犬をける。

はあ？何で蹴る？

「おい。ハンコック！」

「誰じゃ童には向かうのは。」

「シエルティだけど？なにか？」

「！！！」

「とにかく話がしたいので先にお城っぽいいものに入ってるよ。」

「メロメロメロウ。」

「きつかなぐいよ」

「！！。」

「さきいつてるね。」

勝手に話して勝手につきました。

「蛇姫さんまだかね。」

あ、ちなみに柵を乗り越えて入ったよお。
玄関から入らせてくれないでしょう。

「子犬を蹴るのはどうかと思うけどね。」

「童の湯浴みの準備は……。」

「は、整っております。」

「蛇姫様のゆあゝみ。」

「蛇姫様の湯浴みよ。速く外へ。」

下は大変なことになってますなあ。（人事）

あ、ルフィ的な入り方しようか。

天井突き破ってはいるといふ……

よし、しよう。

今頃入ってるようだし

ドカーン

「お、溺れるウ。あ、浅かった。セーフ。」

セリフあってるかなあ

「誰じゃ。」

「あ、お前の背中……。」

「!!!!。」

「姉様。」

「大丈夫?」

「背中を、みられた。」

「たとえ恩人でも生かして置けないね。」

「ここから出て行ってもらう。」

「いあ、それはいいんだけどねえ、話があるんでベットみたいなところにいるから、後から来てね
そんだけ。」

「わかった。いこう。」

「「姉様」」

「あとで、石にしてやる。」

ん？なんか嫌なのが聞こえたけど・・・
ま、いつか。

ただいま、ベットのあるところにいます。

「童を呼んでどうしろというのじゃ。」

「マント、ありがとうね。それと、トリユフ。」

「トリユフ？。」

「まあ、食べてみて。毒は入ってないよ。」

「おいしい。」

「そう、よかった。あと、サンダーソニアの分とマリーゴールドの
ぶんもあるよ。」

「「え、？」」

「一応、船のれてくれたし。」

「あ、ありがとう。」

「よかったニヨお。」

「ニヨン婆」

「またどこから。」

「ニヨン婆の分もあるよ。」

「ありがとうによ。」

「う、おいしい」

「よかった。」

そうして、しばらくまったりしたので

「んじゃ、もうそろそろ帰るね。またいつか寄るのでそんな時はヨロシク。」

「わかった。」

と、ニヨーが島を後にした。

ニヨーガ島での出来事（後書き）

まさかの、蛇姫様が気に入るというアクシデント!!

シエルティ「まさかとはなんだまさかとは！」

亀「てか、エースとの結婚はどうなったの？」

シエルティ「できないっしょ。」

エース「!?!」

とまあ、こんな感じです

（どんな感じだよ!!）

さて次は・・・どうしようか

神になりました

side シエルティ

後にしたのはいいけれど、

どこいこうか・・・

先が真っ暗だ・・・

ペット・・・

そうだ！！

ペットがほしい！

簡単に死なないやつを

（ということで、神さんどこだ）

頭ん中で、言ってみる。

（ふわあ、ねみい）

寝るとかアンの？

（当たり前だろう、我とて元は人間だ）

ほえゝ初耳

（それはいいが、なぜ呼んだ・・・）

ペット！！空想でペット創りたい！！

（んなむちな・・・）

神様！お願い！

女の必殺！眼を潤ませて困っているように見せかける！！

（よし！いいだろう）

すご・・・

まさか効くとは思ってもみなかった

（ただし！）

はい？

（神になれ）

はあああああ？

何で？無理！

めんどくさい！！

（大丈夫だ、誤って召喚されたり、光臨とかもしなくていいから・・・）

しなきゃなんなかったんだ・・・

で、神の能力って？どんなのがプラスされるの？

（・・・今の全ての能力が、1000倍になる。死者を一人につき一回だけ生き返させることができる
覇氣使いじゃないとか攻撃できない。悪魔の実も通じない。一回死んでも大丈夫。寿命は無限。自殺はできる・・・）

す」。

（神になるために試練を乗り越えなきゃならんがな・・・）

どんな？

（一番強い神を）

神を？

（負けと認めさせる）

むりです。

（大丈夫だ。俺でも口で何とかなった。）

ふーん

んじゃ大丈夫だ。

清流とともにつれてって。

（意外とあっさり来たな。まあいい、いくぞ）

つきました。

「ここが、神の領地といわれている。「聖地」だ。」
「わりとありきたりなのね。」

この人。眼、髪ともに金で筋肉質。顔はイケメン？

「おまえ、予想以上にいい女だな。」

「あんたがしたんでしようが。」

「まあな。あれは顔であって、からだまではいかないものだったかな。」

「顔だけかい!!」

一応突っ込んでおく

「で、最強の神様は？」

『ここじゃ』

「お、わりと近くに」

『おぬしも神となりに来たものか』

「いかにも。」

あら？

いつのまにか神さんいないよ？

「で、試験を早くして頂戴。」

『よかるう』

「で、武器とかは？いらないの？」

『つかうのは、こぶしだけじゃ』

「はああああ？」

なぜそうなる。

あんたなら傷ついても大丈夫でしょうがに。

あ、最強神の姿は、コッチも男で、筋肉質。髪と眼は金色です。

『いくぞ』

「はいな。」

スカッ

以外によわい！！

「パーンチ」

『ぐほあ。負けじゃ』

「はやいな・・・。」

『そなたに能力を与えよう。』

「わくわく」

『カッ』

「・・・。」

なーんにも変化なし。

髪は白だし。眼もルビー色だし・・・

あ、でも、額の十字架が・・・かわんない
手に、おお！！右手に薔薇の指輪が！！

『ふむ、そなたは「美の女神」か、』

「そうですか。では、帰ります。」

『まで！』

「ハイなんでしょう」

『おぬし、力がほしくないか。』

「いえ。全然ほしくないです。」

『そうか。つてえええ？』

「これ以上強くなっても仕方が無いかと・・・。」

『覇氣使いの攻撃にもあたらなくしないか？』

「よけりやいいでしょ。」

『きにいった！！我の後となれ。』

「やだ。」

『なぜじゃ！！！』

あゝ

一応ね、婚約みたいなものされてますしね・・・

『なにに？』

「???」

もしかしてこの人も心読んだ!?

『俺がモテ過ぎるだとお?』

いやいやいや言っていないし!!--しかも思っていないし!!--
逃げよう

『おいこら!!--また』

「いや~~~~」

逃げました。

ん?いつのまにか生暖かいものが手の中に・・・って、たまご?
紙もあるし、

はいけいシエルティ様

この卵を持っている

そしたら心の中のお前の聖獣が生まれるだろう
生まれたら指輪に
入れ

と、いつて入れさせてやれ
神より

だとおお!!!

気の効くやつ。ご丁寧に説明しやがって・・・
覚えとれ！後で呪ってやる！！
ともあれ、無事ペットの聖獣が手に入ったんだ。
呪うのは、やめておこう。

神になりました（後書き）

ドンドン最強になっていくシエルティちゃん
さてさてどうなるかな？

何が生まれるかは次の話で！！

聖獣誕生

side シエルティ

私が、神、か。

ところでこの子どんな子の育つのだろう・・・ってか、どんな子が生まれるのだろう

男？女？

できれば女がいいな

清流、男だし・・・

(おい)

ひさしびりだな。神よ

(それはお前もおなじだろうが・・・美の女神よ)

あんたは何の神？

(転生)

そっか。

(お前に伝えたいことがある)

ナンダイ？

(神の能力を使うには、それぞれの覚醒のことは使わなきゃならん)

どんな？

（人それぞれだ）

まじか・・・

（それともう一つ）

なんです？

（覚醒したら、髪の毛が、お前だと銀色になり、眼も銀色になる。そして、羽が生える。服もそれっぽくなる）

どんなんだよ・・・

（こんなんだ）

！！

にあってねーな。転生の神よ・・・

（う、うるさい！！それより、お前のも見せろよ・・・）

まだ言葉知らないし。

（知ったら教えろよな。）

りょーかいー

さてと、考えるか、

まあ、適当に

「月夜のごとく舞い降りよ！覚醒！！」

おお

眼も、髪も、銀色になって

服は、袖が無いふわっとした絹みたいに白いドレス・・・

なんか。ウエスト部分に銀色の細い糸が、巻いてあるんですけど、三十巻きぐらい・・・

（おい！転生の神よ）

（なんだ、覚醒できたのか）

うん

（！！にあってるな）

そうかな？

まあ、お世辞でもありがとう

（ズバツと、感想を言った相手に対して世辞など言わん！）

あ、っそ

それより、転生の神の聖獣は？

（こいつだ。）

金色に輝くねずみでした

・・・

微妙。

(・・・。また素直に感想を・・・。まあそんなところもいいんだけど)

ん？なんか言った？

ま、いいけど。

報告お〜わりッと

さてさて、どう戻るのかな？

どうもどるの〜！？

ははははっは

何で肝心なことを、聞き忘れるんだ〜
ま、適当にいこう

「解除」

いけたか？

いけたね

うし、おk

うん。

この卵何が生まれるのかな？

ボワアア

卵がひかった？

ピキ

ん？なんかいやなおとが・・・

ビキバキ・・・バリバリバリ

ひえええええ
割れてるウウウ

「みゆう」

ん？

なんか手から声が
生まれた？

（お前が我を育てた主か）

（いかにも）

うわゝ

めっちゃ上から目線

（我と契約するか？）

（うむ、しよう）

口調はつられて、こうなっちゃいましたw

（契約のため、我に名前をつけよう）

んー

名前ね

何がいいかな？

このこは、ホワイトタイガーの黒い部分が金になって白い部分が銀
になった。

今は、ちっこい虎

です。

タイガー？

いやいや。

ありきたりすぎるし、可愛いそう。

金と銀　金銀　ゴールドシルバー　こーるとするばー　？？？

思考回路が・・・

こちらの頭は無いのね・・・

私の覚醒のとき眼と髪の色と同じだし・・・

あ、タイガーアイってのあったよな

それって宝石だよねえ

宝石はジュエリーだし

ジュエリー・・・

うん。やめよう

（まだか・・・。）

（あんたって男？女？）

（女だが？）

うし！

暁でどうだ！！

暁

うん！

男っぽい

はあー

暁

赤月でどうだ！！

赤なんて無い！

夜だ・・・

もうそれでいいや・・・

（夜）

（わかった。我の名は夜。このものと契約する）

夜・・・

「みゃ〜」

「ん？」

（よろしくねwごじゅじんちゃま〜）

か、可愛すぎる〜

思わずむぎゅーって抱きしめてしまった

（く、くるしいみよ〜ごしゅじんちゃま〜）

「あ、ああごめん」

『なにやってるんだ。主達は』

「ん〜、なんだろうね？」

「みよ、みゃみゃみゃほあ〜」

「????」

『????』

「あちやもりゆあえ」

「意味分かりません」

『解読不可能』

「こりえで、やっと、おもおうどつりにじゃべれりゆ〜」

「おお〜」

『確かに、この容姿でこの喋り方だと可愛いな。』

「でしょでしょ？」

「でりよでりよ？」

『。。。』

うーん。

さすが赤ちゃん
まねしたがり？

「あ、あれなんだ？」

『海軍？』

「たたかうよ！」

「いきなりちゃんとした言葉に・・・」

『気にせずいくぞ！ぬしよ！！』

「まって。」

「そうしたの？ぬしさまあ」

『？』

「月夜のごとく舞い降りよ！覚醒！！このほうが見つからない。あと、マントもとって・・・変装なり」

「『おお』」

「戦わなくてよし！あと、夜、入れ」

夜が光に包まれ、指輪の中に戻った。

『よかったのか？』

「いいんじゃない？」

『目的地は？』

「んじゃあ、あこのシャボン玉のところ。」
「了解」

聖獣誕生（後書き）

意外に賢いすなあ。シエルティちゃんは、

ま、頭を賢くしていただけある・・・

なぐんで雑談はいいとして・・・

先のストーリーが思いつかない

ワンピースかこれ？

とか思いつつ書いていきます。

このシエルティは海賊とかいろいろ入る気がないので、ってネタバレネタバレ

まあ、がんばりますんで、見捨てないで！

また、奴隷解放

side シエルティ

はあ。

ええ、つきましたよ？

シャボン玉の島に・・・

さて、なにしようかな

まず、騒いでいるところへ行つて
なんかしよう。

「「「わあああ」」」

「1万」

「4万」

オークション？

「ねね、何やってるの？」

「えーっと、奴隷オークションだよ」

「奴隷!!」

よし。この会場壊すの決定。

『さて！はやるな!!』

あ、ちなみに今、清流は十字架の中にいます。
で、何で奴隷にこだわるかというと・・・
はい。かわいそうだからです。
それだけです。

あと、天竜人も嫌いです。

なんでかって？

奴隷も人間なのに、人間以下っておかしいでしょ？
なにさまだっツいの。

あと、えらそうで、癪に障るから。

「早まる？膳は急げって言うでしょ？だから。」

『海軍が出たらどうする』

「倒す。」

『大将でも？』

「倒せるよ？」

『・・・死ぬなよ』

「死ねると思うか？」

『・・・』

お？

あゝんな所に天竜人はっけ〜ん！

殺す！

あ、ちよつと待てよ。

天竜人も奴隷になっちゃえw

というわけで、奴隷になってもらうために、攫います！

ちえっ

天竜人も護衛が多くて入れやしない
もつと有効に金使えつての
もういいや。

『何する気だ』

「ダミーの天竜人置いて、なんか言わせて、天竜人の気配消して、攫う」

『名案だな』

「でしょでしょ！」

『では、がんばれ』

「はい」

さて、やりますか。
まず幻影設置。
本人の気配消す。
なんか喋らせる。

「おまえら、何ボーツとたっているか！速くコッチへ来い！」
「「「は、はい」「」」

よし！成功
んで、捕まえる。
成功。

天竜人の服を変えて、ぼろぼろにして、そして、受付へゴー

「まだエントリーできるか？」

「ぎりぎりだな。」

「じゃあ、これをエントリーしてくれ。」

「わかった。」

せいこーう

ふふふ

さあ、天竜人よ。天竜人に買われるといい

オーツほほほ

ふ、ざまあ

ま、見事に潜入できたことだし、天竜人以外開放してあげますか。

えーっと鍵はどこかな？

あ、ここだ

「攫われた人たち、開放してあげますから静かにはずしてこちらに
来てください。」

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」

お

物分りがいいこと。

あ、もうはずしたのか。

えーっと、見えないように気配を消して、受付から帰る。

脱出成功！

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」

「うん！気をつけて帰ってね。」

さて、奴隷も解放したことだし。帰るか。

天竜人の幻影消して。

今頃大騒ぎしてるだろうな

は、ざまあ

あ、でもここからさっさと逃げないとな。
海軍と相手するのはめんどいし、

「あまたをかける龍よ、わたしの龍よ、今、呪縛を解き放ち、私の前に現れよ!!」

清流召喚!

乗って逃げます

さよ～なら～

また、奴隷解放（後書き）

なんかもう大変だね

はははっは

はあ

すごいなあシエルティは、どんだけ
シエルティ「神だから」

亀「・・・」

まあ、つぎは、いろいろします。
はい。

すごいね・・・。

side シエルティ

ひまぐだ

何しよう。

そうだ!!

転生の神に相手してもらおう

一応神様の世界にいるらしく、神にならないといけないらしく
はあ、なるか・・・

「月夜の語ごとく舞い降りよ！覚醒！！」

そして、聖獣の夜を出して、清流をかたずけて、

「おおきくなあれ。」

あ、でつかくなった。

この子にも効くんだ

さて、

「夜、聖地へ行って！」

『りょーかいみゃ』

・・・。

かわいい

でもでつかいから、なんか変な感じ・・・

ま、いつか。

い

つきました。

「おおゝ美の女神よ。我に会いたかったのか！」

「イエ、転生の神と戯れにただけです。最強の神には会いに来るつもりじゃないです。」

「照れ隠しはよせ。」

あゝメンドイナ

もういいや。こいつを味方につけちゃえ。
かわい子ぶってやれ！

「え、じゃあ本当のことっていいの？」

「ああ。」

注意、これからは、本心から言っているではありません。

「私のこと、しゅき？」

「¥¥¥¥¥¥ああ」

ええええええええ
最強さんが？

この普通の神を？

好き〜〜〜〜〜〜！？

ありえんて、ありえなさすぎ

私は、普通だけど・・・

ははは

もういいや

「へ」

「な、なんだよ。」

「私は好きでも嫌いでも無くて普通だよ普通。」
「！！！」

ま、こんな神ほつといて（ひどい）
転生の神さゝがそ

「どこゝ転生」

「ん？よんだか？シエルテイ」

「おゝ、いたいた」

「なんのようだ。」

「遊んで！」

「・・・なぜ？」

「ひまだし・・・だめ？」

私は上目ずかい&なみだ目をつかった。

「つ・・・しょうがないな。」

「やった」

私の勝利！

さてさて、夜は、最強の神を見た瞬間かたずけたので
だしますか。

てか、ワンピースのキャラと合わない、読者が読んでくれない
この話だけゆるしてw

「私の、聖獣の名前は夜。そっちは？」

「金太郎……。」

センス無！

かわいそう……。

「かわいそうみたいな眼で見るな！」

「だってかわいそうなんだもん。あ、巨大化できる？」

「巨大化？出来るわけ無いだろう？できたら男なら太陽の……神つ
てなるし、女なら月の……女神つてなるぞ？まあできた奴いないか
ら、ホントかどうかわかんないんだが……。」

「私できるよ？」

「うそだあ〜」

「ほんとだよお」

「んじゃやってみろよ。」

「おk。おおきくなあれ。」

「！！ほんとにできるやつっているんだあ。」

「ね？」

「……。」

「この子達って業とかできる？」

「できるだろう。きんたろうのばあいは。」

あ、金太郎出てた。

「シールドできるぞ？」

「私の夜はなにできるの？」

「え」とねえ、聖なる炎、聖なる雷、聖なる氷、聖なる風、聖なる光、聖なる盾」

「おいおい、じょうだんはよせやい。」

「そうだよ？夜。」

「できるもん！ほりやね？」

聖なる炎なら、でっつかいほのおがあらわれ、

雷なら、無数の雷が現れ、

風なら、台風が発生し、

光なら、ちよーど出て来た魔物を天使にするし、

盾なら、どんなのもでも防いで見せた。

はい。主人よりすごいかも・・・

いや、清流並み？

ちなみに、清流もこれぐらいケロッとやって見せた。
こえゝ

「・・・。」

「ほりやね？すごいでしょ？ほめてほめて！」

「すごいね。えらい！これなら魔物全滅しちゃうかも・・・。」
「w」

頭なでながらほめた。

やっぱり嬉しそうな顔

はあ、

「あ、もうゆつりやけだあ。」

「ほんとだね。」

「またなゝ」

「うん！」

さてと、元の世界へ戻りますか・・・。

すごいね……。 (後書き)

ワンピースよ！そしてワンピースの作者さんよ
崩壊しまくってすいません！！

こんなんですが、温かい眼で見守ってください！
そして、読んでください！

駄目元で……。いつてみました。

分かってるんならもどせよ！！

ですね。でももどせません！

あああ

ばれちゃった。(前書き)

サブタイトル意味不でえすよねえ。

かみ合っていないけどよろしくお願いします。

(なにをだよ!!)

ばれちゃった。

side シエルティ

え〜つと、三年すぎました。

え？飛ばしすぎ？

しょうがないじゃないか〜なんも無いんだもん。
あるといっちゃあるけどね。

- 1、なんか大人っぽくなった。そして、ナンパされる日々
- 2、なんか身体能力が5倍になった。暇だったから
- 3、技の強さが、1000倍になった。暇だったから

です。

なんかいろいろとすごくなったよね。いや、元々ではあるけどさ・

・
今頃、ルフィどうなってるかな。

エースは大体予想つくから気にしない。

もうそろそろナミさん本当の仲間にしてるかなあ
一回ルフィのもとへ行ってみよつと

「あまたをかける龍よ、わたしの龍よ、今、呪縛を解放ち、我の
前に現れよ！！」

うし、後は巨大化するだけ

「おおきくなあれ。」

『主よ、我になんのようだ。』

「ルフィのそこへ連れてって。」

『・・・わかった。』

『場所分かる？』

『主の傷で作ったあの玉があるから大丈夫だ。』

『そっか。んじゃ、お願いね。』

『承知した。』

とうちゃく

「仲間だ。」

「・・・うん！」

あゝこのシーン？

ルフィがアーロンを倒して、ナミを本当の仲間に・・・ってのはあ？

アーロンは倒したでしょ？

なんで？何を倒したわけ？

ん？

アーロンの兄らしき人が・・・

（兄っていたの？いたってことにしてください・・・by作者）

ああ。アーロンの代わりにやっただけね。

てか、敵討ちの人の間違っただけ？

私はここにいますよお？

って、死んだ後じゃ意味ないか・・・。

「あのー。お取り込み中スイマセン。ここにルフィ」あ！シエル
「イ！」

「「「「ええー？あの粉雪のシエルティ？」「」「」」

「そうですか。」

ずざざざ

・・・。

何で皆さんそんなに避けるんですか？

あ、にげないでえ

この災いは私だと思ってます？

誤解ですよお

どっちでも同じことになってましたって

「・・・。ぐすん。」

へこむなあ

「あ！アンタは！あの子の女の子！」

「ああ！あの女人に抱きついてた。オレンジの髪の子！」

「あのときはありがとう。」

「いえいえ。お店教えてくれてありがとう。」

お、覚えていてくれたア

感動！

「なんだ、お前ら友達か？」

「「知り合いです。」」

「なあシエルティ！俺の船にのらねえか？」

「いや。」

「なんで？」

「海賊にはなりたくない。敵が増えてメンドいから。」

「えゝ。のろうぜ！」

「それより、ナミさんだっけ？その子の面倒ちゃんと見るのよ！ルフィ！」

「わかってらあ！」

ほんとにわかってるんだか・・・

ゾロとか、サンジとか、ウソップとか、ルフィの担当は？

「手当ては？」

「ああゝそうだった。シエルティこいつらはこんでクレねえか？」

「はあゝ。いいよ。」

「やった！ありがとう！」

めんどいけど。運ぶか。ついでにナミも。

「ナミ。」

「なに？」

「あんたも腕、けがしてるでしょ？運んでってあげるよ。」

「いいよ。あるいていく。」

「わかった。」

ゾロとサンジを看護室？見たいな所へ運んでいって、誰にも見られないか確認して

「月夜のごとく舞い降りよ、覚醒」

女神になり、ゾロの傷、サンジの傷を治していく。
ほうほう？もちろん魔法。

エースのやり方はしないのかつて？
そんな命知らずな行動できるか！！

「！！お前誰だ！！」

あ、ルフィに見つかった。
メンどい。よし！偽名を使おう

「わたしはルーン。この方達を治しにきました。ちょうどいい。あなたの怪我をしてるでしょ？治すのでここに座ってください。」

「あ？ああ。」

私は、傷を指でなぞって治す。

「これでよし！」

「ありがとな！」

「いえいえ。あ、もうそろそろ帰らなくては。では、また」

逃げる

みかん畑に隠れて

「解除。」

ふう。

いつけんらくちゃ

「！！シエルティ？！」

く。。。。

じゃなかったね。

「今の姿何？」

オーマイガー

わたしの女神版まで見られたなんて！

「えーっと。悪魔の実。私は神神の实のモデル女神なの！！」

苦しい言い訳

「ふーん。」

「で？ここにある墓は？」

「ベルメールさんの。」

「あの女の人の？」

「そう。」

「。。。ごめん。」

「何であなたが謝るの？」

「だって、守れなかった。」

「私は守って！なんて一言も言っていないけど？」

「普通は守れるものがあつたら守るでしょう？」

「。。。。」

「ま、こんなこと言ってもシャーないけどね。それよりも、ルフィは海賊だけいい奴だから。」

「？」

「仲間になったやつてよ。」

「うん。」

「てかもう仲間か。」

「うん。」

「もうそろそろ行かないとね。」

「え？」

「ルフィの宴。」

「ああ。」

「いくよ。」

「うん。」

たぶん。めんどくさいことが起きそうだけど。
ま、いつか

ばれちゃった。(後書き)

んと。

はい。なんかすいません。

よみにくいですよねえ

でも読んでくださって皆様ありがとうございます。
これからもしよろしく願います。

いまさらながらにチートですね・・・。

side シエルティ

「宴だああああ！」

はいはい。

えーっと、今は・・・
前回でも言ったとおり
ルフィの宴です。

「シエルティ！なあ！これ食べねえか？」

「いいです。自分で選んで食べます。」

「メロリンメロリン」

「はいはい何？」

上から

ルフィ

私

サンジ

ナミ

です。

ちなみにゾロはなんか飲み比べしてます。
はい。にぎやかですよ？

町の人たちもいるし、主にルフィが・・・

「私、技の練習してくる。」

「いく」

「なんで？ナミ？ゾロ？」

「あんた、粉雪のシエルティでしょ？どうやって5歳で天竜人をころし、大将までも重症になるくらいの力、見せてもらいたいから。」

「俺は、お前と手合わせしてみてえ。」

はあああああ？

私はか弱き女ですよ？

そこらへん間違えてませんか？

まあ、か弱くはないと思うけど・・・。

まあいつか。どうせ暇だし、手合わせ（という名の暇つぶし）やりますか

「いいよ。」

「「わかった。」」

「じゃ、海岸いこ？」

「「おk」」

すんなりきました。

一応条件決めときますか。

「手合わせするときの条件。」

「なんだ？」

「一、剣じゃなく、木刀を使うこと。

二、私は悪魔のみの能力を使わない。

三、殺し合いじゃない。

以上」

「何で悪魔のみの能力使わねえんだ？」

「不公平だからと、使わなくても大丈夫だから。」

「甘くみてつと怪我するぞ？」

「そちらこそ。」

「合図をしたら開始ね？おk？ナミさん？ゾロ？」

「「おk」」

さてと、軽く体ほぐし（というなの試合）をしますか。

「初め！」

ゾロが切りかかってくる。

私はすれすれで避け、腕に足蹴りを食らわす。

ゾロが木刀を離してしまう。だが、

「108ポンド砲！」

「あまい！」

を撃ってくる。

私は避けて最後の一本をうでから叩き落す

「ええ？うそー！」

「くっ・・・。」

「一応言っとくけど。私が本気出してたらあんた。一秒ともかからずに死ぬよ？でも、こんなに強いんだからもつと鍛えると、いつか私を越えるかもね。」

「くいなみてえだ・・・。」

「なんかいった？」

「いや。なんでも」

「私に挑んだ褒美として、私の能力みしてあげる。」

「本当？」

あ、今の本当？はナミです。

「本当。」

ちなみに悪魔のみの能力つてのはいですよ。
魔法のことですよ。
まちがわないでね？

「月夜のごとく舞い降りよ。降臨！」

「きれい(だ)……。」

「凍える涙！」

熱く燃える心！

鋭い目！

速い翼！

それは人間が持っているなり！」

「……。(この人には絶対かなわない)」「」

ちなみに。凍える涙それは人間が持っているなり！までちゃんと
技は出てますよ？

凍える涙なら吹雪

熱く燃える心なら火

鋭い目なら雷

速い翼なら風

で……。

「まだあるよ？

暗い緑

苦しむ草

増える実

吸い取る荒地

それは自然が持つものなり！」

「……。（この人だけは絶対敵に回したくない）」

この技もさつきと同じです
分かりにくかったらゴメンナサイ

「で。この子達
あまたをかける龍よ、わたしの龍よ、今、呪縛を解き放ち、私の前に現れよ!!」

清流（小さい版）

夜（コツチも小さい版）
だしました。

「か、かわいい」

「くえるか？」

「いやいや。食うな。」

上から

ナミ

ゾロ

私

ナミは夜をだっこしてて、ゾロは尻尾持ってる

「や、やめによ」

「かわいい!」

『やめないか!火を噴くぞ!』

「おおしゃべった。」

「『たすけて（たしゅけて）』」

「ははは。」

「『おい!』」

「はいはい助けますよお。」

こういう場合は巨大化

「大きくなあれ」

「「！！すげえ（すごい）」」

「ほらかいほうしたよ？」

『「ありがとう主よ」』

「「こえがかわった。」」

はいはい

清流と夜はちっこい時は子供みたいなこえで、でっかい時は成人したてみたいな声になります。

さてと、ルフィの進行状況も分かったし、帰るか。

ここで一泊してから。

「もう寝るわ。お休み。」

「ああ。」

「お休みね。」

森に行き清流や、夜の上で守るように私は眠りについた

いまさらながらにチートですね・・・。(後書き)

あとがきはある時とないときがあります。
ご了承ください

パーカーにジーンズ。

うわゝナツカシゝ

額にダイヤがある。

指には・・・。

はあ？剣が、2つ交差したような感じの指輪がつて、
こいつも神？

「おい！いきてますかあ？」

「・・・。」

「返事がないただの屍のようだ。」

一応いっとかなきゃね。

「！？ここは・・・。」

「ここは、ワンピースの世界で、今私のペットの清流の上にいます。」

「おくはあく・・・じゃない！」

・・・。

うるさいな。

落っことしてやる。

「わわ、落ちるつて！」

「落としてるんだよ？」

「でてこゝい！ムーン！」

額のダイヤから光が出てきて徐々にユニコーンの形をとる

『よんだか？』

「た、助けてくれゝ！」

『むりだ。』

「見捨てるのか卑怯者！」

『私は、その美の女神にはかなわん。』

「なんだと！！」

あゝもゝ

うるさいな。

「おまえ、美の神だったのか？」

あ！

眼は黒でした。日本人はつけゝん！
やったゝ

「そうだよ？あんたは戦いの神でしょ？」

指輪がそう物語ってるじゃない。

「！！なぜわかった！！。」

「指輪で分かる。」

『『うんうん』』

「で、あんたも転生者でしょ？。」

「なぜそれも！」

「額になんかあるでしょ？それでわかった。」

私だっついてたしねゝ

十字架

まあ、望んだんだけども

「俺の名前はハヤテ。日本から来た。」

「私はシエルティ。同じく日本から来た。」

「俺行く当てないからここで一緒に旅しねえか?。」

「大胆な奴。」

「いいのか?」

どうせ一人でも暇だしねえ
いつか。

「いいよ?」

「じゃあ。関係を決めるな。」

「うん。」

「俺の使い魔になれ!。」

「ええええええ!」

で、現在に至るわけです。
もちろん。答えは・・・

「いや。」

「俺のほうが強いだろう?」

「人間の能力50000倍の10000倍の能力プラス魔力を持ったこの私に勝てるだけでも?」

「ぐっ!!で、でも俺は、戦の神として能力を30000倍まで引き上げている!。」

「普通の人間の能力から?」

「そうだ。」

「私は500000000倍、ぐらいの能力だけど?」

「っ、強!!」

「ふ。」

『美の神様ってすごいな。清流とやらよ。』

『まったくだ。ムーンよ。』

それぞれ雑談しちゃってるし・・・。

「で、もう力関係で行くね。」

『『「え・・・。」』』

「文句アル？」

口だけ笑

威力絶大！

こうして新しい仲間が加わったとき

新しい仲間（後書き）

学校って、キーキーうるさい先生いるんですよね・・・。
行きたくないです。

と、まあ。うん。気にしないで

シエルティ「宿題は？」

亀「なーんのことかなー」

シエルティ「やってないね。そうだね。はいやるよ。」

亀「は、はい。」

てな感じで、学校の宿題やってます。計算ドリル2ページ分を2回
うえええええん

まさかの展開ばかりです

side シエルティ

今、笑ってます。

怒りという影をつけて・・・。

「な〜んてこうなるかな〜？」

「さ、さあ？」

新入りこそハヤテが私の保存食（500年分）を食べやがったので
す。

一切れも残さずに・・・

side out

side ハヤテ

〜朝〜

「あ〜腹減った。飯！」

「・・・。」

ん？こいつ誰だ？

う〜んと、

たしか、昨日神になって落っこちろ！とか言われて、落っこちて、

そんで、こいつが下にいて、

そして、疲れて、龍の上で寝て、

あ〜そっか、

こいつがシエルティで、
今乗っているのが清流。

あ、シエルティの寝顔子供みたいで可愛い。
思わず抱きしめたくなるよなあ

あと、魅力ありすぎるし……。

って、何考えだ！俺！

いまは、腹の虫を何とかするのが先決だろ！

「ん〜っと、あ、あの袋なんだ？」

開いてみる。 おお〜肉と魚と野菜がた〜くさん
たべよう！たぶん朝ごはんだし！食べても大丈夫だろう

「いただきます！」

がつがつ。

ふ〜

完食！

「んあ？おはよう。」

おお〜寝ぼけ顔。

可愛い……。

いやいや。そうじゃなくて……。

「おはよう。」

「……！！！」

「ん？どした？。」

あれ？シエルティの顔が見る見るうちに青くなっていくんだけど……

・。

もしかして、食べちゃまずかったかな？

「あの袋の中に入っていたのをたべた？」

「うん。」

「全部？」

「うん。」

で、現在に至ります。

顔！顔が怖い

ははははは

「私の保存食500年分を・・・返せ!!!!!!!!!!!!!!。」

「ごめんなさい~~~~~」

ホントスイマセン。

どうしよう

「こうしてても始まらない。食料は何とかするとして・・・あ、あの船なんていいよね。」

なにするきですか？

あ、分けてもらうのですね

でも、海賊船ですよ？

「ニヤリ」

襲うのですか？

そんなわけではないでしょう

だって、美の女神でしょう？

「さて、食料分けてもらってくるか。」

ほっ。

襲うではなかったんだ。

「いくよ。」

「はい。」

て、俺いつの間に敬語？

s i d e o u t

s i d e シエルティ

ふふふ

さてと、この船の食料分けてもらいますか。船ごと

「清流！下降して。」

『承知した。』

さてと、ついた。

「ん？なんか降りてきたぞ？海軍か？もしくは俺達のところに入りたいのかよい？」

変な誤解するな。

クルー１

「あのー私は、そのためにきたんじゃないか。食料を分けてもらいにきたんです。」

ぶりっ子モードで突入

これで男達は少なくとも聞いてくれる・・・分けないか

「食料？あいにくないんだよい。」

やっぱり、こんな小船じゃないか・・・。
乗ってるの一人だし・・・。

「んじゃあ、どこに行ったらくれるの？」

「俺達の、船よい。」

「どこにあるのでしゅか？」

「まあついて来いよい。」

「はい。」

そして、私達はついていった。

のはいいものの。え？つきましたよ？

白ひげの乗っている船に・・・。

な〜んか聞いたことある口ちょうかと思ったら・・・。

マルコ？

そんな感じの名前の人だったとは。
ついてな〜い

「ぐららら。息子よ、こいつたちは？」

「俺の船に落ちてきたよい。」

あ、清流はついたときにすぐ額に入れました。

「ぐららら。お前達のなは？」

「フードとれば分かると思う。」

そっいつて私はフードをとった。

一同騒然。

「ぐらららら。粉雪のシエルティか。」

「そうだけど。」

分かってなさそ〜な

ハヤテに耳打ちで私が六億の賞金首だということを告げる。
もちろんビックリしてた

「男のほうは？」

「おれは、は、ハヤテだ。」

かくかくしてるし・・・。

そりゃね、こんな大物だしねえ。

私？私は免疫あるから大丈夫

「おまえら、俺の子供になれ。」

「断る。それより食料を分けて船もほしいんだけど。」

「ぐららら。面白い野郎だ。食料はやろう。だが船は・・・そうだな、ここで1週かん暮らししたらやろう。」

「わかった。」

ハヤテよ・・・。

もう気を失う直前みたいな状態だな・・・。

まあしかたがないのだけれども・・・。

はあ、大変なことになった。

まさかの展開ばかりです（後書き）

シエルティちゃん白ひげにつかまってしまいました。

暮らすのだそうです。

エースに会えるかな？

多分会えるとは思うけど・・・。

あれ？何で私は最初思っていた展開とはまったく別の展開に
っているのだ？

誰か戻してくれ！

（自分で戻せ）

一日目

side ハヤテ

なんか勝手に暮らすことになってるし！

てか六億って・・・

どんなことしたん？？？

いやいや。暮らしたくない！！

だって怖いじゃん！

あの白ひげのところに

一週間だよ？！一週間！

もう気を失っちゃお・・・

side out

side シエルティ

バタリ

ん？

ハヤテよ、これぐらいのことで気を失うなよ……。

「ぐららら。もう気を失ったか。」

「ほんと、やわなんだから。男の癖に……。」

「ぐららら。まあ飲め。」

「酒？」

「そうだ。」

「まあちよつとだけなら。のんでやってもいいよ。」

「てめえ、よく親父にそのようなことを……。」

「いいんだ。」

「でも親父。」

あの～

私の存在忘れないで下さる？

覇氣だしますよお？

いいんですか？

「ま、のめや。」

お、もどった。

「しかたがないね。」

私は渡された、酒をのむ。

「ふむ、いい酒だね。」

「だろ？」

「さて、わたしは「シエルティ！」？」

「「?」?」

いま、エースの声がしたような・・・。

「エースさんのお帰りだよい。」

「ふん。」

「ぐららら。もう帰ってきたか。」

やっぱいるんだ。

てか白ひげ倒すとかいつてなかったっけ？
ま、知ってたけど。こうなることは・・・。

「シエルティも白ひげ海賊団に入るのか？」

「私は海賊にはならない。」

「なんで？」

「いろいろめんどくさくなるから。」

「おま・・・。それだけで？」

「それだけ。」

「で、その男は誰なんだ？」

・・・。

伝えたら怒りそうだなあ。

でも心広いから大丈夫か・・・。

「ハヤテ。空から降ってきて今旅をともにしてる。」

「・・・。そうか。」

やっぱ心広いな

「ぐららら。お前ら知り合いか？」

「「幼馴染」」

「エース。この女は今日から一週間ここで暮らすんだ。」

「えええ!？」

「ぐららら。」

よく笑うな

「シエルティ。」

「なんだ。白ひげ。」

「お前の部屋はマルコが案内してくれる。」

「わかった。ハヤテの部屋は？」

「俺の息子たちと同じ部屋さ。」

「りょーかい。」

さてと、マルコを探すか。

お! ! いたいた。

「マルコ!」

「! ! うおう! びっくりしたよい。」

「部屋案内して?」

上目ずかい

白ひげにやっても無意味だしねえ

「わかった。」

「で? どこ?」

「ここだ。」

近! !

ま、いつか。

「マルコさ〜ん。」

「お、エース。」

「シエルティ借りてもいいですか？」

「エースの女だったのか。」

「まあ「ちがう・・・。」」

肯定される前に言っておく

え？肯定じゃないかもって？

たぶん肯定するだろうと思ったし・・・。

え？なぜ分かったって？

感。

で、エースにつれられ。人気の少ないところにきました。

「シエルティ。ハヤテとはどうゆう関係なんだ。」

「旅のお供。下僕。」

「・・・。そうか。」

「エースは？何で白ひげのところ乗ってるの？」

「親父が思ったよりいい人だったから・・・。」

「んじゃ。結婚の話はなかったことで。」

「ちょ、まてよ。」

私は席を立とうとした。

が、呼び止められた。

まだなんかあんの？

「なに？六億でも用意できたの？」

「いや。用意できてないけど。でもなあ。俺には新しい夢ができたんだ！」

「どんな？」

「親父を海賊王にする。」

「ふん。」

「だからそれができたときに。お前と結婚するからな！押し倒しても！」

こわいな

ま、一生来ないけど。作品道理にいったら・・・。

「わかった。期待してるよ？」

よにいう天使の微笑み的な感じで微笑んでみた。

「・・・。」

「あはは！エースがおまっかつか！」

「うるせ・・・。」

「ふう。疲れた。もうねよつと。海王類食べてから。」

「え・・・。」

さてと、海に潜りますか

「白ひげに食料調達してくるって言うって。」

「うんわかった。ってええ？」

いくよ。

バシャーン

あ！！

海王類だ！

しかも超特大の！！

うし。

パーんち

頭蓋骨砕けたな。

後はこれをもつてあがるだけ。

「シエルティが、海に食料調達に行った？」

「ああ。」

「そりゃ見ものだ。エース。どこで落ちた？」

「あこで落ちたんだが……。もう30分あがってこねえ。」

「「「！！！」」」

「誰か助けに行つてやれよい。」

「わかった。一番泳ぎが得意な俺が行く。」

「おう。たのんだぜ。」

うつるさいな

あ、そうだ。

これもつて違ふところ出て驚かそう。

誰もいないところであがつて。私なりに調理する。うん。完璧

「いなかった。」

「ええ？まじかよ！」

「どうするんだよい。」

おーおー

いつてくれるじゃないの

よし、そろそろ驚かそうか

「私ならここにいるけど？」

「「「「ええええええ」」」」

「料理できてるから。たべて。」

「
「
「
「
「
まじか
「
「
「
「

盛大な晚餐がすぎ、何も残らず
私は眠りについた。

一日目（後書き）

いかがでしょうか。

できれば感想とかよろしくお願いします。

二日目

side ハヤテ

うゝん

頭が痛い。

あれ？ここどこだ？

あ、そつか。俺倒れたんだっけ

白ひげと一緒に一週間暮らすという事実が発覚して・・・。

まあ、シエルティのためなら・・・

って、何考えてんだ！俺！！

相手はあのシエルティだぞ！！

どんな相手でも一瞬で落ちてしまつあの最強の神でもふられた相手をだぞ？

むりむり！

俺なんか・・・。

でもな

以外に脈あり？

って！すきでもないのに何考えてんだ！

シエルティがいてくればほかなんていないね

うん。

あら？

俺狂ってきた？

もう一回寝て・・・

「おきろよい。」

ええええ！？

マルコさんんん！？

「お前の仕事の皿洗い、洗濯、掃除ができてないよい。」
「おれそんなことやつたことないからこいよい。」・・・は
い。」

怖い
です。

たとえ能力1000倍にしても勝ていっしょ。

だって不死身だし・・・。

え？悪魔の实の能力無効にできるだろって？

あ、それ。

女神しかできないんですよねえ。

しょぼいなんておもわないでよね・・・。

できないんだもん。

「速くこいよい」

「はい！」

ええええええええええ！

これ全部ですか？

この部屋いっぱいの洗濯物。

むりつす。

だって洗濯機ないんでしょ？

手洗いなんでしょ？

むりむり。

「ちなみにこれお前がやらないとシエルティがやることになるぞ？」

やらなきやな。

シエルティのために・・・。

べ、べつに好きだからとか思っていないんだからな！

s i d e o u t

s i d e シェルティ

うゝん

ねむい

でも起きなきゃな

ここ白ひげのとこだし・・・。

ま、なんとかなるっしょ

「さてと、何すりゃいいのかな？」

あ、マルコ

「マルコ」。」「

「・・・。なんだよい。」

「仕事ってない？」

「あるよい？」

「なに？」

「洗濯。まだハヤテが終わってないんだよな。」

「え、手伝わなきゃ。朝ごはん食べられないじゃん。」

さてと。

気配探知機。

あ、これは精神を集中してあいてのけはいをさがすことができる優れもの

あ、いたいた。

「ハヤテ？」

「え、なに？」

「なにその大量の洗濯物。部屋いっぱい。」

「俺の仕事だから。そこでまってる。」

「意外に優しいね。紳士的？」

「よ、よけいだい。以外には・・・。」

「ま、どうでもいいんだけど。私の朝ごはんが遅くなるのは嫌だし、さっさと終わらせる。どいて。」

「えっ、ちょ・・・。」

「いいから。」

「・・・。はい。」

「うん、えらいこえらいこ。」

頭をなでてやる。

恥ずかしそうにかお真っ赤にしてうつむいている。
さて、洗うか。

「水さん、水さんこれを洗ってくださいな。」

と、水を操って洗う。

え？どうやって洗ったって？

気にしない気にしない。

「風よ。乾かせ。」

風で乾かす。

「たため。」

物を操ってたたむ。

「ふう完了。」

「お、お前どうやって・・・。」

「気にしない気にしない。気にしたら負けだし。」

「は、はあ。」

さてと、洗濯終わったし、ご飯もらってこよ。

「マルコ。」

「え、呼び捨てにしてんの？」

「当たり前。私より弱いもん。」

違う？

だって、私には能力無効にできるもん。

「なんだよい。」

「おわったし、ご飯頂戴。」

「ほんとかよい？」

「わたがうわけ？」

「まあいいよい。」

「ごはん。」

「はいよい。二人分。」

「ハイハヤテ。」

「あ、ありがとう。」

ハヤテになんかものすごくボリュームある朝食を渡す。
ん？

何で赤くなってるの？

ま、いつか。

「いただきます。」

朝食を食べる。

清流額に入れてるから、どんどん入る。
5分で、終わった。

「「ごちそうさま。」」

「やけに速いよい。」

「「うん。」」

「そしてやけにシンクロしてる。」

「そうかな？」

「いや違うだよ。」

「もういいよい。」

そして、昼。

私は海王類釣りしてる。

え？何でって？

暇だから。

「お、かった。なぐんだ小物じゃん。」
「え、どれどれって、でか!!!」
「え？だって100メートルだよ？」
「十分でかいって。」
「これを料理長らしき人に見せて。そして夕飯にする。」
「・・・」

夜。

やけに豪華でした。
そりゃ海王類っただけアルよねえ
そして寝る。
何でこんなに速いかって？
暇でなんもなかったから。

二日目（後書き）

コメントください。

白ひげ滞在期間、終わり

side シエルティ

3、4、5、6、7日目です。

何でこんなに速いかつて？

はい。なんもなかったからです。

え？

あ、はい一個ありました。

なぜか、白ひげ海賊団の隊長&今で言う黒ひげ以外の人に告白されました。

もちろん全部断りましたよ？

なぜって？

後々面倒だからです。

まあさておき

今日で、食料&船もらえるぞー！！

やったー

「ぐららら。本当に俺の息子にならないか？」

「私女。それに、後々めんどくさいからヤダ。」

「ぐららら。まあいい。船をやるっ。ほらよ。」

・・・。

船投げないで下さい。

まあ、片手で受け取ったけどね。

ん？

こ、これは・・・！！

普通の船でした。

ルフィが最初に乗っていた船みたいなものです。

自分で作ったほうが速かった。
まあいい。

「食料は積んであるからな。」

「わかった。んじゃ〜ね〜。」

「「「「おれたちも・・・。」」「」「」」

あのねえ

あんたら（白ひげ団の皆さんです。）いかげんにせえや
いちどいったらう？

いまきげんわりいんじゃわれえ
ん？なぜって？

朝早くたたき起こされたから。

（あと作者が疲れてるからboy作者）

「却下。」

「「「「「ガーン」「」「」」」

「いこ？ハヤテ。」

「お、おう。」

side out

side ハヤテ

シエルティ

何でそんなに怒ってるの？

そりゃ、朝、マルコさんが叩き起こしたって言ってたけどさあ俺、そこまで根に持たないよ？

唯一の助けが、俺に怒りが向いてないことだけど……。後で怒りがコツチに向くかも知れんな。気をつけよう。

「いこ？ハヤテ。」

「お、おう。」

く

可愛いぜ！

下から目線で、微笑んで、

男子キラー並だな。

本人は無意識でやってるのだろうけど。

こりゃ、俺が恋人！

って主張できるような、そんな男になりてえ

俺達は船に乗り込んだ。

シエルティが片手でつかんだ船に……。。

「ぐらら。気が変わったらいつでもこいよ。」
「「「「「おれたちも待ってるからね」」「「「「「
「絶対行かない。」

ほ、よかった。

つて、何で俺が安心してゐるんだよ！

まるで好きな人を思ってるみたいに！！

お、俺は別に好きなんじゃないんだからな！！

そう思っているうちにもう白ひげの船が見えなくなった。

「ねむい・・・。」

「え？」

「おやすみなさい・・・。」

「ええ？」

シエルティは、俺のひざで寝てしまった。

ど、どうしよう。

でも、なんかうれし・・・って！！だから何で俺がこんなこと思わなきゃいけないんだ！

俺も現実逃避しよっかな。

今も俺の力。

つまり、神の力のことまだ分かってないんだし、

この世界のことも・・・。

ちよっと、昔のことでも回想してみよっかな

白ひげ滞在期間、終わり（後書き）

更新遅れてしまつて申し訳御座いません；

なんせ巫女の舞の練習があつたもんで、遅れました。

たまに遅れるかもしれないですが。

温かい眼で見守ってください。

あと、文がやばいですが。

ツ気にしないで下さい。

ここで人気ランキングを作りたいと思います。

え？なぜって？

気になるから

？シエルティ

？ハヤテ

？清流

？夜

？エース

？ルフィ

です。

どれが好きですか？

感想ください。

ハヤテの過去

side ハヤテ

ワンピースに来る前の名前ってなんだったっけ・・・

あ、そうだ

風早 疾風

だった。

俺はどんな奴だったっけ。

なんか女子にキヤーキヤー騒がれてたっけ・・・。

それに、好きなやつもいたな、

つきもり
月森 よか 夜華

っていうやつで、容姿も、何もかも普通だったけど

優しいんだよな、そして我慢強くて、心が綺麗だった。

たいてい俺の周りにいるやつは心が黒かったり、自分のこと棚に上げている奴とか、たまに違うやつもいるけど・・・まあ全部いっつもくっついてくるけどな。

でも夜華はちがった。

何しても俺のこと好きになってくれなかったし、

最初は面白半分にやったけど、アイツの誠実さや優しさを見るたびに
どんどん好きになったいったんだ。

そっぴいやシエルティって夜華に似ているよな・・・。

容姿とか体形・・・まあ体形は似ているけれども、なんかオーラ
みたいなものがな・・・。

起きたら聞いてみよつと。

それにしてもこいつ、起きているときも可愛いけど寝たらまた一段
と可愛いな。

いやいや。一般的な感覚で見たらだぞ。俺的には夜華のほうが可愛い
けどな。

そこら辺違えるなよ！

「ん・・・・・・・・。」

「？」

「風早さ・・・ん？」

「いや、まああつてるけど？」

「じゃないよねえ、いたら逃げなきゃ。」

「なんじゃそりゃ。」

たしかに、追いかけてたりしたが？

そんなにしたか？

一週間だけだったのに・・・。

「あ、私何言ってるんだろう？風早さんいたらここ日本だしねえ。」

「とにかく眼を覚まそう。」

多分これはいつものとおり寝ぼけているんだろう
説明しよう！

シエルティは朝に弱いのだ

そのまんまだな

ま、いいとして

眼が覚めたみたいだな。

・・・海水かぶってたし

つてかちよつとびしょぬれでエロい~~~~~

軽く透けてるのがエロい~~~~~

まあ、マントが透けてるだけなんですけどね。
うち

「で、話って？」

あ、もう乾いてる。
はや！

「あ、えーっと。あ、そうそう！」

「?」

「シエルティって、ここに来る前どんな名前だった？」

「月森夜華。」

「もう一回言ってる?」

「だから！つ、き、も、り、よ、か！」

「!!!! ええええええええええええええええ!!
!?!?!?」

「うるさい！！そういうあんたは？」

「風早疾風。」

「そのまんまだね。」

「うん、うん」

ま、まさかの月森夜華だったとは。道理でオーラが似ている。

「で？ほかには？」

「俺のことすきか？」

「疾風のほう？ ハヤテのほう？」

「疾風のほうで……。」

「普通。」

ビニョーなとこ行つたな。

「ほかには・？」

「今の俺は？」

「普通？」

？がついた！

え、ということなんですか？

俺期待しちゃってもいいんですか？

好きになる見込みがあるって・・・。

「まあ、もっと使える奴になってくれないと、好きになんないかもね。」

「別に俺はお前に好きになってもらいたいわけじゃないんだからな・・。」

「ま、どうでもいいけど。」

「いいのかい。」

俺ってツンデレなのか？

いまさらだが。

ま、いつか。

おれはこのままこの生活を楽しみたいわけだし、今は気にしなくていいか。

「おやすみ。」

「またか！！まあ俺も寝るからいいけど。」

明日、なにがあるかな。

また新しい仲間が増えた

side シエルティ

私は朝に弱い。

なぜなら、膨大な眠気と戦わなければならないからだ
ほっといたらたぶん一日中寝ているであろう。

そんな私をいつも起こしてくれるのは・・・

ハヤテだ。

起こし方が「布団」（海王類で作った）をはぐという方法で
まあそれでも起きないから眠気を覚ますために海水かぶってんです
けどね。

今日もそういう起こし方をくらった。

そして、海水をかぶった。

あ、マント着るの忘れた。

マント着ないと海水で洋服が透けて見えて恥ずかしいのだけでも、

「おま・・・。」

見られた。

速く乾かさないと。

「光よ早く乾かして。」

ふう。

かわいた。

「ハヤテ、見たでしょ？」

「だっていきなりやるからだろ！」

「まあ見られたもんはしょうがないか。」

しょうがない。

一回目だし。

次ぎやったら殺すけどね。

「みゃー。」

ん？なんかひざに乗ってる。
なんだこれ。

「なにこれ。」

「しらねえよ。」

猫さん？

「あ！！！！おまえか！」

「だれ？知り合い？ハヤテのペット？」

「秀吾か！」

だれですか？

「ほら！おぼえてねえか？同じクラスの栗山秀吾！」

「えっと・・・ああ！」

あの王子様達の・・・

あ、王子様っていうのは、学校で1〜5番目にかっこいい人のこと
栗山さんは2番目ね。

ハヤテは1番目。

「で、なぜ猫？」

「みゆー。」

「喋れないの？」

「みや！」

栗山さんは、うなずいた。

「あ！神が猫になった場合誰かとキスしろっていった。」

「ハヤテ、あんたがしろ。」

「ええええええええええ！」

わたしはいやだからね。

やりたくないからね。

「か、神が、女とじゃないと無理だつて……神の。」

「私神だし。」

「だからだろ！！」

え

やだ〜

「みやあああ」

栗山さんまで登って訴えてるし、

たすけて〜つて。

ま、もういいや。

やっ
ち
ゃ
え
！

「わかつたやから。」

ふしぎだ。

「おれは風早疾風。こっちではハヤテな！」

「わたしは月森夜華ね。こっちではシエルティ。」

「夜華ちゃん?!」

「あ、はい。」

「おい！ハヤテなにこの夜・・・じゃなくてシエルティと抜け駆けしようとしてんだよ！」

「俺のほうが強いもん！」

「なにい？おれはなあ！獣の神なんだよ！聖獣は火の鳥だし！のうりよくの5000倍にしてもたってるんだよ！」

「何で戦いの神より獣のほうが上なんだよ！」

「しらねえよ！」

あゝもーうるさいな。

清流出してとめてもらお。

「あまたをかける龍よ、わたしの龍よ、今、呪縛を解き放ち、我の前に現れよ!!」

「おおきくなあれ！」

『よんだか。』

「なんだこれ！」

「久々に出て来た・・・。」

「とまったし、戻っていいよ。」

『なんなんだ』

また清流が額に戻る。

「「なんやかんやで、一番強いのが。シエルティって」
「ありがとう。」」

ま、また一人増えたけど状況は同じだろうし・・・。

夜

え、時間の経過が早いつて？

気にしない。

気にしたら負けだよ！

暇だったただけだから。

「で、俺はどこで寝ればいいんだ？」

「私はどこでもいいし・・・暖かいところだったら。」

寒いのです。

なぜかは知らないけど・・・。

「あ、シュウ。」

「なんだ？」

「猫になって！」

「なぜ？」

「いいから。」

「しょうがないなあ。」

ふふふ。

抱き枕&カイロがわり

「なつてやんねえ。」

「ええええ!？」

「いいじゃんか。体温が37度あるんだし。」

うし!

これならいけるぞ!
でかいけど・・・。

「ハヤテも寝よ?」

カイロがふたつ

「ああわかった。」

「シュウの寝転んで。」

「あ?うん」

「で、私はその間にはいつて、ふとんかけておやすみ」

なんかシュウ&ハヤテが眼を真ん丸くしてるけど、ま、いつか。

シュウを抱きしめて、おやすみ
ん?

なんかシュウもコツチ向いて私をギュっしてしている。

あ、そのほうがあったかいかも・・・

あ、ハヤテもギュっしてしている。
あったかい。

おやすみ

また新しい仲間が増えた（後書き）

感想ください・・・。

無い！！（前書き）

やっと感想きた~~~~~

どれどれ？文に幼さが出ている。
なおせません。

どうやって直せばいいんですか
経験浅いつて罪だねえ

あ、でも

いいところもないし、

・・・。

駄目文じゃん

これは個人の感想なので気にしないで下さい。
では短いですがどうぞ！！

無い！！

side シエルティ

朝です。

布団をはぎにくるな……

でも今日という今日は、はがされないぞ！！

「おゝきゝろっ！！」

「むりゝゝゝゝ！！」

「zzzz」

あれ？もしかしてシュウもお寝坊さん？

あ、布団はがされた。

しょうがないなあ

起きてやるか……。

今日はマントきるのは、忘れてないし、

海水かぶって……

冷たい。

「ねえ、ハヤテ。」

「なんだ？」

「この海水って何度？」

「-0」

「何でこんなのかぶってしまったんでしょうか……。」

体強化されて……

るよねえ？

なかったらどうしょうか……

「おはよ。」

「「いまごろ？」」

おそい！

人のこといえないけど！！

てかこのごろよく人降ってくるな

しかもクラスの人たちばかり！

なんでかなあ？

ま、おいといて。

朝ご飯作り

おみそ　おみそ

おみそしる

確かこのたるに・・・。

ないね。

樽間違えた？

他のたるは・・・？

ないね。

んじゃあ他の調味料は？

・・・。

な~~~~~い~~~~~！！！！！！！！！！

なんで！？なんでないの？

んじゃあお金は？

ない。

え？ええ！？

なんでないの？

つかってないよおお？？

「ねえ、何でお金ないの？」

「「さあ？」」

「かせぐよ……。」

かせがなきゃね

お米もみくんなないんだもん。
調味料も。

「……。ええええええ！！！！！！」

「なんもないから。」

「「どうやって？」」

「海王類を釣りまくってさばいて売る！！！！」

「「むりです。」」

「さばいたことねえし？なんていわせないよ！！私がさばくから。」

「できるの？」

「まかせなさい」

こうして荒稼ぎが始まった

準備（前書き）

ちよつと甘い？かしんないです。
長時間放置してスイマセンですた。
こつから合宿なのでしばらく更新できません。

準備

side シエルティ

私は釣竿……

も、ない

餌……

も、ない

私は水着……

も、ない

銚

も、ない

どうすんの？

「なあシエルティ。」

「なに？」

「銚は？」

「ない。」

「てか釣竿……」

「ない。」

「網。」

「ない。」

「どうすんの？」

「素潜りでとる。」

「いやむりでしょう。」

「あんた、神を覚醒したらできるでしょうに！戦の神でしょう？」

「シュウ。」

「俺一応猫だからできない。」

「そんなあ。」

「シエルティは？」

「美の女神ですけど？な・に・か？」

「はい。ぼくやります。」

口論で勝つには適度な押しあるのみ！

自論です

そういつて、ハヤテは何かしら呪文を唱え始めた。

「俺の力！覚醒！」

そのまんまだな

やっぱ男子ってこういうのにとられないタイプ多いの？ねえ？

あ、ハヤテの姿説明

髪が私と同じく銀で目も銀で服がいかにも神です！ってかんじ。

そんでもってかなりの美形だと思う。

私から見てもきれいだと思う。

なぜか見惚れてしまった。

そして私を見てむすとした顔のシュウも呪文を唱え始めた。

「俺の力・・・覚醒！！」

おなじですかああああ？

男子って（以下同文）

シュウの姿説明

髪がこちらと同じく銀で目も銀で服がいかにも神です！って感じ。

こちらも美男子

猫耳まで銀になっている・・・。

ねえ？これは元がいいからなの？何でこんなにかっこいいのよ！！！！

なんか私だけ普通に置いてきぼり食らってるみたいだったので

「月夜の」ごとく舞い降りよ、覚醒」

ふ、どうよ。

彫るかに劣っている私の美貌をとくとみよ！
ふははははは

「「・・・・・・・・・・きれいだ。」」

はい？

え？え？なんでどうして？

あ、そりゃ美の女神だからきれいだとおもいますよ？
でも地があたしじゃ〜ね〜

宝の持ち腐れって言うか・・・
で、海王類は？

「とつてきたぞ！」

はやっ！

なんかシュウもとつてきてるし！

むりしなくていいよ〜

二人合わせて10匹もいるから・・・・・・・・。

さばくのたいへん！

「・・・・・・・・さばいた。内臓で袋とか水筒とか作った。肉は乾燥されたのと、ソーセージとハムをつくった。

皮で洋服作ったからそのうちの一枚やる。」

すい。

さいしょできないでいったのに！

すごいすごい！

ここはしよじきにいつてみよう

「すごい。すごいよ！シユウ！これはご褒美上げなきゃ！なっかい
つてみ？なんでもあげるよ！」

さいごは、まあ、すごいことやってのけたからのご褒美

「おれはあ？」

「あんたは普通だし！つまあ誉めてあげる。」

「何その上から目線。」

「実際一番下だから。力。」

「何も言い返せねえじゃねえか……。」

あ、いいすぎた？

なんかめツちゃへこんでる。

あ、なぐさめまきや

「ごめんごめん。言い過ぎた。なんがご褒美上げるから？ね？なん
でもいいからね？」

やっぱ一生懸命したのにご褒美もらえないって悲しいよね。
ごめん。きずかなかった。

「ご褒美。つてなにをいえば……。」

……。

なんでもっていったよね？

「わかった。こっちからするから。」

私はハヤテ&シュウに抱きついた。
そして二人の耳元で

（ありがとう。とてもたすかった。）

と、いった。

二人は、顔まっかつか。そしてフリーズ

「さ、あこで商売するよ！」

わたしは、近くの島を指差した。

商売開始

side シエルティ

暑い太陽

さらさらの砂漠

そして、体から水分が抜けていくところ
アラバスタ王国

ん？

なんでみんなへばってるの？
私全然平気。

水の魔法かけて常に潤ってますから
男の神って使えないのかな？
この魔法。

あらら？

あんなところに町がある！
そこで商売しようウ

「あこで商売するからがんばって。」
「あゝい。」

ホントに大丈夫？
まあ、一応魔法かけとくか
熱中症とかになったら困るしね。

「水よ、潤せ。」
「ええ？なんか涼しいぞ？」
「涼しい。」

「あと少しだよ。」

そう、この魔法はあまり持たないのだ。
もってせいぜい一時間

今は30分目

ひたすら歩く歩く
とまらずに歩く

そしてつきました。

・・・。

なぐんかみたことある人たちがいるんですけど・・・。
鼻が長い奴と麦わらの奴とマリモツばい奴と眉毛がくりくりの奴と
あと髪が青色の奴と・・・。
はい。

麦わらさんたちでした。

見つかるやばいな

一応顔変化の魔法かけて、蛇姫様の顔にして、商売開始！

「えゝ、海王類の肉いらんかねゝ。服もあるよゝ。」

こんな感じでいいかな？

あ、断りなしに商売開始したからなんかおろおろしている。
ハヤテたち面白！

「あ、これ下さい。」

なみさああああん！

「はい。五千ベリーになります。」

「高っ！！」

「わかりましたよお。二千ベリーになります。」

「買います。」

「まいど！」

は

値段決め解けばよかった。

お？

こんどは？

エースですかあああああ！

「この肉10？ください。」

「五千ベリーになります。」

「買います。」

「まいど！」

的な感じでどんどんたまるたまる。

あゝ便利だ。

ありゃ？

もうなくなつた。

なゝんだ。つまんないの。

さてと、当初の目的だった調味料を買いにいきますか。

ということ、お二人さんにはお留守番してもらいましょう。

なぜって？ナンパされるのはもうこりこりだから。

二人には顔変化の魔法かけれないしね。

「お留守番ヨロシク。」

「「わかった。」」

なゝんだ

聞き分けいいじゃないの

さてと店探しに行きますか。

みつめました。
なになに？

「強い店」

なんじゃよそりゃあああああ
入ってみよっかな

いや、でもこんなときは入ったらだめなんじゃ・・・

いやでも~~~~

く~~~~

いこ

「いらっしやい。まずは私と戦ってかったら好きなだけもっていきな！」

なんてきまえがいいの！
やります！

むかつく！

side シエルティ

「やります。多分あなた私に勝てないだろうけどね。」

「それをそのままそっくり返してやるよ！」

「そっくり返したら私が勝負売ってるってみたいじゃないですか
！」

「そんなんでもいいよ！はやくはじめるよ！」

ったく。

なんで、わたしが、

こんなコスプレしなきゃなんないのよおおお

しかもなんで巫女装束？

意味わかんないし！

「はじめるよ！」

・・・。

武器ってあなただけ持つものなんですか。

私にはないのですか

はあ

わかりました。

やりますよ。

「桜！」

敵が私に向かって無数に剣を振るう
そんな技です。

敵さんのですよ。

「ただの足蹴り」

そのまんまですよ？

え〜と

私が避けて間合いを詰めてわき腹にけっただけですよ？

なのに・・・

何で死に掛けになってるんですか？

私、海兵にまた追いかけられるじゃないですか！

「あんた。やるね。約束だよ。好きなだけ持っていきな！」

「やった〜。」

そういつて

片っ端から取っていく

私を通った後には調味料一切無し！

ビンごと無し！

「はははは。」

あれ？

敵さん狂った？

「いや〜見事なもらいっぷりだね。気に入った。私の証明書上げるからいつでもおいで！」

「え？あ、ありがとうございます。」

狂ったね〜

ちゃっかり返事してなんかゴテゴテのピンクのカードもらったけど。

ま、いつか。

s i d e o u t

s i d e シュウ

まだか、夜華・・・もといシエルティは
ここでまってる
なんていうから仕方なく待ってるのだから
おそい！
し、しかも

「ねえ、あなたのなまえは？」

「どこからきたの？」

「私と遊ばない？」

なんなんだこの、
女に囲まれた状態は！
ハヤテも巻き添え食ってるし！
ここでもこうなるのか
まあ、徹底的に無視してるけど・・・
速く誰か助けてくれ！

s i d e o u t

s i d e シエルティ

あ、やばいやばい
速く帰らなきゃだめだったんだった

「ん？あこつて何であんなに人が集まってるの？つて、あこつてまさか・・・ハヤテたちがいた場所だよね？」

いってみよう。

「ねえ、あそぼ〜よ。」

「うぜえ。」

「あそぼつてばあ。」

ん？

今、シュウの声がしたような・・・

「ちよつと失礼。」

人混みを書き分けて進む。

あの猫耳は・・・

「シュウとハヤテ？」

「「遅い！シエルテイ！」」

「ごめんごめん。」

「ちよつとお。」

「なんですか？」

「この人たちはあたしのなの！私の会話邪魔しないで！」

なんなんだ。

この女の人は！

しかも何気に私より胸でかいし！

むゝかゝつゝくゝ

「この人たちは私の下僕よ！気安く触らないで。」

「はあ？」

「ね？」

「「は、はい。」」

いくよ！といわんばかりにひっぱっていく

そして、どんどん引張ってって私達の船が置いてあるところについた。

「なあ、なんでこんなところに・・・」

「はあ、むかついた。」

「「え？」」

「なんでもない！」

私よりスタイルいい人なんて許さない！

始めて私に黒いものが生まれた瞬間だった。

みんなの守護獣と額の獣

side シエルティ

「あゝも〜!。」

「「どうしたんだよ?こんどは。」」

「ちよつと嫉妬しただけ。」

「「何に?」」

「あんたらに言ってもわかんない!」

乙女心なんて男子に分かるわけないでしょ!
もう!

私ってやっぱスタイル悪い?

いや、一般的には悪くないけどね・・・
いきすぎてもだめだしなあ

「なあ、シュウの守護獣ってなんだ?」

「あ?狛犬。」

「じゃあ額に入ってるのは?」

あ、シュウの額にはダイヤのマークがあるよw

「ねずみ。」

「・・・普通だな。」

「悪かったな。」

ほえ

狛犬とねずみなんだ。
初耳だ。

「おまえは？」

「え？俺は守護獣はペガサスで、額にはユニコーンだ。」

「馬か。」

「なんだよ。」

「いや？べつに」

ハヤテは想像上のいきものか……

「「シエルティは？」」

「なぜこつちにはなしが……。」

「「俺たち話したし」」

「……。」

「「ほら、はやく！」」

「額は龍、守護獣は虎。」

「「……すごいな。」」

「そりやどうも」

どうせ私は規格外ですよ！
わるかったね！

どうせ私は……

人外ですよ！

恋なんて必要ないほど強いんですよ！

あれ？なんかちがうかも？

ま、いつか。

「召還するか？」

「んじゃ俺も。」

「……。私も。」

「「「せーの」」」

あ、そろった。

「「召還！」」

「召還。あまたをかける龍よ、わたしの龍よ、今、呪縛を解き放ち、
我の前に現れよ！」」

シユウのねずみは黒色でしかもなんか触ったらしびれそうなほど異常な電気を発している

狒犬は白色で風をまとっている。

ハヤテのユニコーンは白色で角が生えている体は普通の馬
ペガサスは白色で翼が生えていて、体は普通の馬。
どこまでも普通だね。

「「シエルティだけなんか強そう。」」

「悪かったね！」

もう！

ま、みんなの守護獣とか見れて良かったよ。

人型になりまして

side シエルティ

なんか今日一日怒ってばかりだな
やっぱね

このごろいろいろあったからその疲れがきているのだろう

「戦だ」。

と、部外者さんの声が聞こえた。
私耳いいからね

でも

はい？

なぜ？

なんで？

「そうなの？ハヤテ。」

こういうに確かめることができるのは
戦いの神、ハヤテだ。

「ああ。さっきまでいた町で争いが起こっている。」

「そうみたいだな。剣と剣の重なり合う音が聞こえる。」

「ええ？んじゃあ手を出すのも悪いね。」

「「なぜ？」」

前々から思っていたんだけども
よくかさなるな

シュウとハヤテの声

いやいや

今思いをはせたいのはそこじゃなくて……
えーっと

「この先の物語を変えることになるかもしれないでしょう？それに、
ルフィの経験地のためにも。」

「そりやそうか。」

あーよかった

こんな理由で納得してくれて
本当は戦いがめんどくさかったただだし
それに人目をはばからず練習できるしねー

あーよくないけどよかった。

「んじゃ練習してるし声かけないでね。」

「わかった。」

ふう

練習。

まず、詠唱なしでできるようにならないと。

「なあ。」

「こえかけるな、って言わなかった？」

「いや、俺らの守護獣たちを人型にできないかなーとおもって……
。」

「できるのか」

「やってみるだけだから。そんなに期待しないでくれ……。」
「わかった。」

「おつしゃー。」

シユウ、人型にできたんなら言ってよ。

「んじゃ、召喚して。」

「「おk」」

「「「召喚」」」

みんないつせいに召喚した。

ちなみにシユウも自分の守護獣人型にしてみたいのだったさ

シユウがなにやら唱え始める

何になるのかな？

たのしみ

「できた。」

「「どれどれ？」」

・・・

みんなイケメンだね

狒犬は耳も尻尾も目もともと白なんだけど黒になってるし、なんかマント羽織っているし・・・

カラスの羽みたいなのが首周りと下のほうについている。全体的に

黒。髪型はロン毛とショートカットの中間ぐらい、性別は男

ねずみさんは、ロングヘアの女の子で、こっちも動物のときは反対の色をしてて、白いそのガーディアン羽織ってて、服は普通の白い長袖。スカートをはいててこちら色はしろ。全体的に白だね夜は、・・・・。こっちも反対の色の黒になってるし。胸元がしっかりあいた黒のドレスを着ている。

ひじ上辺りまである手袋もしている

清流・・・・もともと青色だったんだけどね、反対の赤になっているし、服はルフィの着ているチョッキのボタン無しの前が開いているようなので、下は短いズボンで、虎ガラです。

皆さん、なんでもとの色と反対なんですか？

あと、なぜかハヤテの動物達は人型にならないようで・・・
かわいそうに・・・

意外な包容力

side シエルティ

「ねえ」

「なんだ？」

「ハヤテの獣達ってほんとに人型にできないの？」

「できるちゃっでできるが……。」

「ならやって？」

「はあ？」

「みたいし！」

「まあ……いいよ。」

おお！

やっとハヤテの獣達の人型が見れるぞ！

やったあ〜

「ほら。」

「え！はや！」

ん〜

ユニコーンのほうは、ストレートロングで、額に角がはえてて、服は襟のところが肩が見えるくらい開いている長袖のワンピース。色は全て黒

ペガサスは、ユニコーンの額のツノ無し。

双子？ツつてぐらいにそっくりな顔

全体的に少し幼い。

こんなでした。

なんか守ってやらなきゃな〜って思ってしまうほど可愛い。

こんな風な妹いたらな〜

「どうせ俺なんて……」

さつきからぶーぶー言っているハヤテ
うん。きずいてないね

「おい。なに寝ぼけたこといつてんの？現実を見なさい現実を！」
「ん？おお！！」

ホントに世話がやける……。

ま、そんなところが可愛いんだけどね。

いや！変な意味じゃないよ！！

そのところ誤解しないでね……。

あれ？

誰に対して言っただ私は……

ま、いつか。

で、話は戻り

なぜか呆然としているハヤテと、いじけているシュウ
みんなどしたの？

「予想と違う。」

「なんか違う。」

ああ。

そうゆうことか。

「「何でこんなに子供っぽいんだ……。」」

えええええ！！！！

そこですか？

普通、何でこんなに可愛いんだ。とか、もっとかっこいいのがよかった。とかだよな？

そうだよな？

まあ、確かに、夜の尻尾で遊んでいるところを見ると子供っぽいかもしれないけど。

ま、それはそれで可愛いじゃん？

男とかの見方って女と違うとかよく耳にするけど、まさかね。

「あ、だあああああああああああ」

！？

いつたいなにが？

振り向くとそこには

大声で泣き叫ぶ。ハヤテの動物達がいた…………。

え？

見かけより精神年齢すごく低いんだ…………

まさかの赤ちゃんレベル

もしくは幼稚園入りたて、いや、入りたてでもここまでひどくないか…………

どうやって泣き止ませようか

「ほーら、よしよし、泣かないでね。お兄ちゃん困ってるよ。」

「え？」

いま、私言っただんじゃありませんよ？

シューがいったんです。

あの無口で無愛想？なシュウが！！
以外だ。

い意外な包容力

そして、ハヤテの動物達は泣き止んだ。

意外な包容力（後書き）

遅くなってスイマセンでした。

高校生活〜番外編〜

side シエルティ

さてさて、話はもどり私がまだ普通の高校生だったところの話です。ちなみに今は高校二年生です。

「まじか……。」

私は、運動能力普通、知力は常に1〜5位の間。なぜかスタイルがいい。けど、目が悪い。
自称凡人です。

そんなわたしが……。なぜ、この学校で入学当初から騒がれているイケメン王子トップ5といわれる人たちの前で自己紹介をしなきゃならないんですか
まあ、当たり前といったら当たり前なんですけどね。

なぜかこのクラスに集まってるのですから
そして、人のことを知るために自己紹介。
これは、運命の悪戯というものですかね……。
神様ってひどいな……。
どういうことを言えばよいのでしょうか。

「じゃあ、次！月森夜華。」

「はい。私、月森夜華です。えっと……友達募集しています。……。」

わあ。

めっちゃめっちゃ適当だったけど大丈夫……。な、分けないか。
くすくす言っている人がいるし

はあ。

「次！風早疾風。」

「はい。風早疾風です。ヨロシクな！」

「「「「キヤアア~~~~~!!!!!!」」」」

女子からの黄色い悲鳴が聞こえてくるね。

流石人気ナンバーワン。

さわやかだ……

「次！栗山秀吾！」

「はい。栗山秀吾だ。よろ……」

「「「「キヤアア~~~~~!!!!!!」」」」

うわ

自己紹介私より手抜いてる。

こいつはクールタイプ

「次！竹切 剣真^{たけぎり けんま}」

「はい。我の名は竹切剣真。以後よろしく。」

じゃっかん昔風の言い方

こいつは、優等生タイプ。眼鏡かけてます。

「次！赤坂 勝正^{あかさか かつまさ}！」

「はい。俺、赤坂勝正！かつって呼んでいいぜ！」

うはあ

コッチもさわやかタイプ

可愛い女子にもてそう……

「文句言わない！配るからそれぞれもらったらはじめてくれ。それじゃあ配るぞ〜」

さて、がんばりますか！

高校生活ゝ番外編ゝ（後書き）

長らくお待たせいたしました。

これからひとまずワンピースシリーズ休憩で高校生シリーズが初まります。

あまり更新できないかもしれませんが、どうぞお気になさらずに
長に待ってくださいませ・・・。

高校生〜番外編〜2話目

side夜華

ん？こんなん楽勝じゃん！

うわあ。なんなのこれ簡単すぎ！！

中学生でも解けるわ

。なんたつて中学の向き抜き打ちテスト並みの問題ですからね……。

「集めるぞ〜！」

余裕余裕。

あれ？みんななんで落ち込んでるの？

おかしいでしょ？

中学の抜き打ちテスト並だよ？

「んじゃあ、今日は後自由にしていーぞ〜」

「「「「「やつた〜」「」「」「」」

ええええええええ！？

なぜ？

おかしいよ〜いやだよ〜

ただでさえ私友達いないのに……。

初めてのクラスで私の知っている人いないからね……。

やばあ

へこんできた。

これからどうしよう……。。

よし、ここは前向きにかんがえよう。

まず友達を作……り。
うん。無理

「おい」

どうしょ

私は頭をかかえる

「おいつて。」

うるさいな

だれだよ。

「え……。」

栗山さんですか……。

うん。白昼夢見てるんだ。

「おまえ。これから予定あるか？」

「え、あ、はい。ないです。」

いきなり何てこと聞いてくんのこの人……!!
なに? なにかやうでもあるのですか!?

「おい。引くな。」

「あ、はい。」

私は無意識に引いていたようだ。

「んじゃあ。これからいつしょにかえらねえ?」

「えっと。自由時間とはいっても帰ったらだめなんじゃ……。」
「今日もう学習時間ないけど?」

「あ、そうだったんですか。えっと。一緒に帰ります。帰る人居ないし……。」

あつぶね

断れなかったし……って言おうとしていた。

「じゃあ、校門で待つてるからな。」

「あ、はい。よろしく願います。」

よし、さっさと用意して先回りしてやれ！
って、もう居ない……!!

わたしはあわてて教科書をつめ、競歩で玄関まで行った。
後は靴を履いて……

ドンッ

「あ、ごめんなさ……。」

「って、な何するんだよ!。」

「ひい。すいませんでした。本当にゴメンナサイ。」

いきなり胸倉をつかまれた。

いやだよ

こわいよ

なんでぶつかっただけなのに。
どうしよう。

「女子に暴力をふるうとは紳士らしくありませんな」
「竹切さん……。」

とっさに現れてくれた竹切さん
ホントに助かるよ

ん？この名札三年って書いてあるんですけど・・・。
ひええええええ

「あ？なんだこの坊主？喧嘩売ってんのか？あア？」
「言っているのがわかりませんか？月森さんを解放しないと紳士的
ではないといっているのです。」

おお。

すごい、すごいよ！
竹切さん見直したよ！ほれるかも・・・。
ってほど惚れっぽくないけどね。

「きゃ・・・。」

放り投げられた。
いた・・・くない！？

「っ・・・大丈夫ですか？」
「竹切さんこそ大丈夫ですか？」

私を受け止めてくれた。竹切さんとっさに降りてつつい聞いてし
まった。

「おい！お前の名前の名前なんだ？」

「？」

「女のほうだよ！」

私〜！？

普通竹切さんのとこじゃない？

「えつと・・・月森夜華です。」

「え？！まじでか！！やっべ〜ボスにしばかれる〜！！夜華ちゃん
ごめんね。このことはボスに言わないでねお願いね！」

と、捨て台詞を残して去っていった六年
なんだっただんだ？

高校生活〜番外編〜三話目

side夜華

あ、やつば。

栗山さんまたしてたんだった。

急いで校門に人を避けながら行つた。

「おい。月森先輩。」

こんどは何!?

後ろから声がしたので、止まって後ろを振り向くと……

今度はちつこい一年がいた。

今日はなんなんだ。

なぜこんなについていないんだ。

「なに?」

一応返事はしておく。

「ちょっとコツチにきてください。」

「!？」

「大丈夫ですから。」

えええええ!?

なに? なんなの? こいつ!!

何したいの?

もうヤダよ

何でこんなについてないの?

なぜ？

ええええ！？

「おそい。」

「はい。スイマセン」

「まあ、いいけどよ。帰りどっちだ？」
「こっちです。」

私は右をさした。

「まじか……。反対じゃんよお。」

「あ、すいません。」

「んじゃあ。気をつけて帰れよな。」

「はい。ではさようなら。」

「はいよ。」

・・・。

私はこんなに栗山さんがおしゃべりだったとは知りませんでした。

そして、帰り道に・・・。

一話のようなことがあり、げんざいにいたるわけですよ。

ああ。ながいながい。

高校生活〱番外編〱三話目（後書き）

更新遅れてスイマセンでした。

そしてなんとめっちゃ短い！！

後誤字脱字が多い。

そのところスルーしてもらえるとありがたいです・・・・。

たいへんなことになりました。

side シエルティ

そして次の日。

え？とか思わないでください。

めんどくさかったんですよ。

はい。私はそういう性格ですから、なんも言わないでください。
んで、反乱終わったらしいです。

え？だって土煙とかたつてないし、

さてさて、今頃待ちはドンチャン騒ぎ・・・なので！

紛れ込んでちよっとお城に侵入しちゃいたいと思います。

もちろん、男は連れて行かない予定です。

ついてきそうだけどね・・・。

ま、いいとして。

夜になるまで待つて

んで、実行したいと思ってます。

さてさて。ここから、こいつら（ハヤテ、シュウ）をどう撒くか・

・・・うし。

いつも道理に過ごして魔法で瞬間移動でいく。

うん。ありきたり。

まあいいのさ

「ハヤテ、シュウ。これから私、魔法の訓練するから半径1キロメートル以内近寄らないでね。

かすり傷どころか一瞬で死ぬから」

「は、はい。」

ちよつと殺氣こめて言ってみました
うんうん。びびってるびびってる。

さてと、からかいも済んだし（このごろ日常茶飯事なのw）気を引き締めて、いざ。

「速い羽」

これで背中に羽がつく

「加速する心」

これで、もう人の目には見えない。
神以外だけだね。

「フライ」

これで宙に浮き

「消えるからだ」

これで透明になります。

ちゃんと消えてるかな〜！？

魔法で創った鏡でチェック。

どうやって作ったかは、想像にお任せします。

うんバッチリ。

よし。これで前ハヤテが練習していたのをやる

ブイスター
「火炎」

太陽の熱を固定して力を倍にして敵に投げつける技。球体

ブリザードジャベリン
「槍氷」

空気中の水分を固定して力を倍にして敵に投げつける技。槍

サンダーカッター
「落雷」

体にある静電気を固定して力を倍にして敵を切る技。剣

ハヤテブーメラン
「疾風」

自分名前付けたか……。風を固定して力を倍にしてブーメランみたいに投げる。ブーメラン

これらが一撃で一般人が死ぬ技です。
危ない技だねえ。

ここからさらに強い技があります。

え？ハヤテが考えたのってか？いいえ。私です。

ブイスターフレイヤー
「火炎柱」

ブイスター
火炎の柱版で威力が格段に上がっている。

ブリザードシャーク
「氷鯨」

氷々（ブリザード）の鯨版でこちらの威力が格段に上がっている。

サンダー
スネイク
「雷蛇」

落雷の蛇版でこちらも威力が格段に上がっている。

ハヤテバード
「疾風鳥」

疾風の鳥版でこちらも威力が格段に上がっている。

これらが一撃で人間が死ぬのです。

うわあ砂漠なのにもうわけ分からんことになっている・・・。

スルーしよう。

かえんりゅう
「火炎龍」

火炎の龍です。

きょうなめりゅう
「氷鯨龍」

氷の龍です。

らいじゃりゅう
「雷蛇龍」

雷の龍です。

しつぷうりゅう
「疾風龍」

疾風の龍です。

メテオ
「闇龍」

闇の龍です。

「サンシャイン
光龍」

光の龍です。

「シャンロン
神龍」

龍の中の神です。

「ブレイク
破壊龍」

破壊の龍です。

これらは敵に噛み付く技で光の速度の200倍、かすただけでも普通の神殺せます。

光、月が最初に来る女神、神は生き残ってます。うわあ。女神なの私って、しかも美の……。どうせなら戦いの女神の方があってるよね……。

戦いの神しつかり!!

ん？下の（元）砂漠かい？もうわかるでしょ？ぐちゃぐちゃだよ。

まあスルーで。

ちなみに私の能力も見なかったことにしよう……。そのほうが世のためだよ……。

いざとなったら魔王のなれるかもね……。

たいへんなことになりました。(後書き)

さてさて次はお城に忍び込んでいます。
どうなるのかな？

忍び込む準備

side シエルティ

さてさて、いつの間にやら夜になってたし。寝た振りして・・・あ、重大な事実発覚したんだった。というか、みつけたんだった。それは、臭いがあること。

これじゃあシユウに見つかるよ。

あ、フライで飛ぶか。うん。そうしよう。

「もう寝よう。」・・・と、シユウ

「ああ。」・・・とハヤテ

「今日は遅めに寝るよ。星がきれいだしね。」・・・と、私

「はあ？」

「え？だって星がきれいだし？大丈夫大丈夫。」

「あぶないっしょ・・・。」

「なぜ？」

「・・・。」

「まあ、そんなわけで私は早めに着替えるから。こっちみないでよね。」

「は、はい。」

私は動きやすい黒の半袖半ズボンのできる限り肌を見せたバーション。ズボンの方は股から10cmしかないし、上着はそでなし。それにチョッキ（迷彩色柄）をとりだした。

そして金縛りの魔法をかける

「硬くなるからだ。」

これで動かない。
そして

「消えるからだ。」

透明にして、着替える。

・・・着替え完了

よし。ちゃんと着替えできた。あとは後ろの髪の毛を銀のゴムで縛って、前髪を銀のヘアピンで留めたら

あとはこの魔法を解いて、次いでにアツチも解こう。

「かいじょ解除」

これで解けたかな？

「うおう。動ける。」・・・とハヤテ

「解けた」・・・とシュウ

「んじゃあ。私は早めに寝るね。」

「「ok。」」

おやすみ・・・。

ふわあ

はあ。今何時かなあ。

9時・・・。

うん。健康男子は寝て

私は後ろへ振り返るなぜならハヤテたちの後ろで寝たからだ。

「ん？起きたのか？」

「いねええええええええ。」

思わず叫んでしまった。

「ん？なにがいねえんだ？」

「なんでもない。」

寝ていなかった。ンじゃあ何してたの？

まあいつか。

寝起きだしどうでもいいから。

「私は早く寝る方が好みだったのに・・・まだ寝てないんだなんて・

・・・」

「おやすみ。」

「お、おやすみ。」

おお！効果抜群じゃん！

ハヤテは私のことがス・・・好きだからだけど、シュウはなんですか？

ま、いつか。

さてと、忍び込みましょうか。

えーっとアラバスタにあるルフィたちがいるお城は・・・。

あつた！！

遠い！！！！！！

えゝ

ま、いつか。

フライで飛んでいこつと。

「速い羽」
はやいはね

「加速する心」
かそくするこころ

「フライ」

よし。

飛んでいきますか。

えゝつとまあ

速いようですが、着きました。

しよばいけど一応体隠してないのですよね……。

誰にも見つからないって寂しいし……

さてさて、一応屋根みたいなところについたんで、そこから侵入
ゝみたいなの？

さっこく行動にうつそつと

忍び込む準備（後書き）

大変遅くなってスイマセンでした。
でも、まあ

・・・。

「久しぶりにあとがきに登場だああ！」

「シエ、シエルティ・・・。」

「ん？ああ。やっと自分の文才のなさに気づいたね。更新遅いのはあんたのせいだよ？私は速く忍び込みたくてうずうずしてるのに・・・。」

「忍び込むのは犯罪なんじゃ・・・。」

「亀よ。」

「はい。」

「あなたがそうしたんじやろうがアア！！龍よぶぞ、龍！！。」

「ひいひい。ごめんなさい。できるだけ速く更新しますからあ。このとおりです。」

「よし。許そう。」

てなわけで、更新はシエルティちゃ

「ああ！？」

・・・シエルティ様のおかげでだいぶ速くなりそうです。

「一言足りないよね？ん？」

さつきからものすごい顔で見ているシエルティ様。はい。そうです
忘れてました。

見捨てないでください。

「心が広い方ばかりだと思うのでね〜って、いいなさいよ!! 本当
に心が広い方達ばかりなんだかね!!。」

はい。わすれてました。

心が広い読者様方どうか見捨てないでください！
お願いします。

以上大変長いあとがきでした。

忍び込め・・・た？

side シエルティ

さつきから廊下らしきものを歩いてるのだけれども・・・。
いやはや誰にも見つけれない。

とゆうか、人が通らない。

面白くね？

「あれ・・・？さつきもここ通ったような。」

この調子だからつけたら奇跡だね奇跡。

いわゆる迷子さんですよ迷子。

知能上がったのになんでこんなのは直んないんだ・・・。
転生の神のバカ・・・。

直せつての。

あゝもついいや

お風呂お借りしましょう。

このごろお風呂は入れてないからね。

えゝっとお風呂は・・・うん。迷子さんには分からない。

よし。魔法使おう。目的地につける魔法なんてあるのかね？
ま、とりあえず言ってみましょう

「月夜の光を我が道しるべになれ。」

的な？

おお！！

こういうときの感はずばらしく上がってるね！！
ちゃんと光の道ができてる

よし。進もう。

「てってけてってけてってけて」

なんとなく気晴らしに言ってみる。

お？ついたかな？

んじゃ遠慮なく

「消えるからだ。」

さてさて、ここはうゝん。一応裸になって、ぬいだ洋服は・・・犬なる魔法かけとくか。

どうして犬にしたかは・・・気分的に？

今日はダックスにしてみようと。

「ダックスになれ。」

おおゝなつたなつた。

さてさてお風呂いただきますか。

ガラガラガラ

「きゃあ！！なに？何が起きたの？」

「ええゝつつ？何で扉が勝手に開いたの？」

「どうした？ナミさんびびちゃん。」

「どうしたんだナミ？」

「どうした？」

「どうしたんだ？」

・・・上から

ナミ

ビビ

サンジ

ルフィ

ウソップ

ゾロ

チョッパーっていたっけ？

です。

おおあわててるあわててる。

あ、ナミたちがこっちにくる。

逃げる逃げる

「フライ」

ヒュッ

逃げる

私は湯煙の間を煙のように縫っていく

「今声が・・・」

「ええ！？」

あ、ルフィたちはナミの裸を見て撃沈しました。

ちっ

聞こえていたか・・・

まあいい。

解除するか。

あ、タオルくらい巻いてますからね。

「解除。お久しぶりナミさん。」

「！！シエルティ。」

「あの粉雪のシエルティ！？ええええええ！！！！！」

ビビさんビククリして転びそうになってるし・・・

ナミさん啞然

「まあ、このごろお風呂はいつてないのでお風呂使わせていただきますね。」

「あ、どうぞ。」

お、あっさり

「「「「粉雪のシエルティ！？」「」「」」

今頃か・・・

男性達よ・・・

「粉雪のシエルティってあの？」

「ほんとか！？」

「もう一度手合わせを・・・」

「ええええええ！？」

上から

サンジ

ルフィ

ゾロ

そしてウソップ、チョッパー

あー

もういいや

お風呂いたいたし

え？ちゃんと洗ったし温まりましたよ？
なので。

「ダックス。」

「わん！」

服でできたダックスフンドを呼び寄せて
どうやってでできたのかは知らないけど

「かいじよ。」

服を着て。

「んじゃあ。部屋で待ってるからね。」

去りました。

迷い猫になりかけた。

side シエルティ

さてさて、先にいつているといったけれども、
・・・やっぱりなっちゃんだんですよ

迷子に。

なんなんだこの迷子さんは。

なぜなるんだ~~~~

って、最初は思っていましたよ。

今は、あきらめました。

魔法・・・使ったほうが良いですかね。

もうかれこれ一時間たってますからね。

自分にほとほとあきれるなあ・・・。

まあしゃーない

なっちゃったんだから。

・・・。 唱えよう

「月夜の光よ我の道しるべになれ。」

最初からこうすればよかったな

なんかいろいろなところが抜けてるな・・・。

ボケてきた？

いやいや。そんなないやだ。

な〜んてかんがえたらなんかすんごい豪華な扉についちゃったよ。

ここかな？

「はいつていいですか？」

気になったことを一つ

「金髪の人。聞きたいことがあるのですが。」

「なんですか？」

うわあ、目が、目が

ハートだ・・・。

たぶんこれ、サンジ・・・

だよ

ま、そんなことはどうでもいいから

「ここに猫の耳がついた男と黒髪のやけに美人な男来ませんでしたか？」

「いい「パリーン。」」

なんか窓ガラス割れた。
なぜ？

「「シエルティー!!」」

ハヤテとシュウでした。

って、なぜええええ??????

「あ、お前らだな！シエルティちゃんに気にかけてもらえているやつらってのは！」

うん。

ま、無事？な、顔見られたし、いつか。

「帰るよ！お前ら！」

「「あ、はい。」」

「んじゃ〜ね〜またいつかどこか出会おう!。」

と、まあ撤収したわけですよ。

迷い猫になりかけた。
(後書き)

次はシエルティちゃん
みんなにしかられるよ

お説教のち波乱の予感！？

side シエルティ

「ったく。なぜこうも一人で行くんだ！お前は！」

今、お説教を食らってます。

私が悪いんだけどもね、

正座で一時間もお説教って・・・

うっん。

なんかなあ

こんだけやらされると、逆に反省できないよ・・・。

「聞ってるのか！？」

「はい。聞いています。」

ちなみにお説教してるのはハヤテです。

シユウは・・・。なんか無視されています。

「わかったな！」

「はい。」

ふう。やっと終わった。

お説教長かったな。

きつと顔はげっさりしていることだろう。

なんか気分転換に・・・。

「ううつ・・・。」

なぜか私は泣いてしまった。
自分でもビックリしている。

なんでこんなに涙がでるのか、と

お説教なんて日常茶飯事的にやらされてた私が
なぜ泣くのか、と、

もうわけわからんよお
声を押し殺して泣く。

もちろん人目のないところだが……。

「な……んで……な……く……の？」

涙声になりながら言ってみた。
が、答えは返って

「悲しいからじゃない？」

きた~~~~~~~~。

ええ!?

誰このひと。

「あ、俺？」

「えっと……だれですか？」

いきなり出てきた人にビックリして涙が止まってしまった。

「俺の名前は、竹切剣真。よろしく。」

「た、竹切さん!？」

「え?知ってるの？」

「しってるもなにも……。」

同じクラスダツタジャナイデスカ。
なんていえません。
こんなところで個人情報漏らしてどうする。

「えっと、疾風と秀吾さがしてるのですが・・・。」
「えっと・・・はい。しっていますよ。」
「ほんとうですか!？」
「はい。」
「やったああ!。」

おいおい。ついもらしちまったよ。
どうするよ。
ハヤテはともかくシユウは猫耳生えてるぞ?
ま、いつか。

「じゃ、いきますか。」
「魔法で行きますんで、しっかりつかまっててくださいね。」
「はい。」
「レポート転送」

つきました。

「大丈夫ですか?」
「ええ、なんとか。」
「「シエルティ!なんだその男は!!!」」
「俺は・・・って疾風!？」
「よく見たら・・・剣真!？」
「「久しぶりだなあ」」

と、抱きついていい二人。

取り残された私とシュウ。

「おいシュウ！剣真だぞ！」

「ああ。」

「え！？もしかしてこのコスプレ男が秀吾さん！？」

「コスプレって言うな。」

「すいません。で、この猫耳は本物ですか？」

「ああ。」

「触らしてもらっても……。」

「やだ。」

「はい。で、このお方は？」

なごむねえ

青春だねえ

つて、私！？

「「シエルティ」」

「シエルティです。元……」

元……のどこからなぜか口ふさがれた。
なぜ？

「そうですか。シエルティさんですか。ありがとうございます。
二人に合わせていただいて。」

「いえいえそんないそうなものじゃ……。」

「ぜひ恩返しを……。」

これはドラマよく見る波乱の予感です！的なやつでしょうか……。
そうだったら……。
めんどくさいのはごめんだね。

ついていけないかも・・・(前書き)

更新遅れて申し訳ありませんでした!!

「「^だ本当」」

・・・。

即答でした。

ええええええ？

普通照れたりしませんか？

例えノリでぼろっと出たとしても真顔で即答って・・・

「それじゃあ、このひとは月森夜華さんですか？あの鬼の番長がぞつこんだったという。」

「え？」

鬼の・・・番長・・・？

しかもぞつこん？

てか、鬼の番長って・・・。

なんかすごい大きい鬼のような顔で強い人ですか？

しかも名前が鬼島おにしま 鬼丸おにまるっていうすごい鬼っぽい名前の人ですか？

わたし・・・そんな人に・・・

てか鬼島さんがぞつこん・・・

まてまてまて

何で見抜いたの？剣真さん。

「いやはや声を聞いたときからなんとなく予想がついていて、そして口を押さえた理由とあてまめたらな

となくわかりました。」

「え？？マジですか・・・まあわたしは月森夜華であってますよ？」

「やっぱりですか！！」

うわああ

この人かん鋭い

ついていけないかも・・・（後書き）

シエルティちゃん本来の可愛さ忘れかけてますよね
あんた世界一可愛いのに・・・。

このままオリキヤラ増えるんだろーなー
増えても見捨てないでくださいね

なんかやばいことになっているようです

side シエルティ

あ、もう船に乗りこんだよw

せめて美の神らしくならないとな

服装は・・・

まあ近くに島あるしそこで買うとして、

戦闘にそなえて武器も買っとくか、見かけだけでも

シユウ、ハヤテ、剣真

つて・・・剣真さんだけ漢字だね。

ここって漢字やめといった方がいいのでは？

あ、きいてみよ

「剣真さん。」

「はい？なんでしょう。」

「ここでの名前を考えてください。じゃないとなんか違和感があるので。」

「わかりました・・・じゃあ分かりやすく「ケン」でどうでしょう。」

「いいんじゃないですか？」

「ありがとうございます。」

ケンか・・・

そのまんまだね

ま、いつか

あれ？ケンって神だから聖獣とかいるのでは？

額にルビィはまってる

ってことは額に何か入ってるのかな？

指輪は・・・おお!!

すごいな・・・

山吹の花だ・・・

花言葉は「気品」

そのまんま

「あの〜。」

「「「なに? (んでしよう) (だ?)」」」

「ケンの聖獣って何?」

「え〜っと出した方が早いですね。両方出しますか?」

「「「もちろん!」」」

「我の名にてここに召喚する。我を守りし聖獣よ、あらわれよ!」

やけにかっこいいせりふですね〜

お?

私の髪の色と同じ白い狼、目は金色。軽く二mはあるよね〜
空に浮いてて助かった。

もう一匹は、額に入ってた方だね。

幻獣のフェニックス

まっかつか〜。触ると燃えそう

でつか〜。一mあるよね〜

「狼の方が銀。鳥のほうはニクス。」

「「「かっこいい(っけー)」」」

「戻れ。」

ええええ????

もどしちゃうの?

ま、邪魔だからいいけどね!

「で、この街でいったん買い物したいから。」

h

即答？

「わあああああああああああああああああああああああ
あああああああああああああああああああああ あ」

h?

あ、なんか空から降ってくる
このパターンもうなれたわ
またなんかクラスメイトがくるんでしょ？

「あ、転生の神だ」

あ、ほんとだ〜
ひさしぶりだね〜
でもこの船に落ちてこられたくないから

「フライ」

「え？まほう？」

受け取りに行きマース

「よっとお。」

「はあはあはあ・・・。」

わあお

腹裂けてる

血がやっぱあ

ま直すか

フルキユア
「治療」

ん。

なおった

「とにかく、回復してから聞か。」

私は転生の神とともに船に降りた。

武器高いよ……

side シエルティ

「おい！何でこんなに血まみれなんだ？」

「何かあったようですね……。」

「戦か？」

「さあ……。」

とりあえず今は寝てるけど……。

起きたら聞いてみよう

もし戦闘だったら大変だしなア

勝てるかわかんないし……。

武器は必要だよねえ

「もし戦闘だったら勝てるかわかんないし、これから行く先が機で戦いに巻き込まれるかもしれない……。だから早めに武器を買つときたいのだけれども……。」

「もし買いに行くのなら誰かここで転生の神の見張りをしなければならぬですね。」

「俺がやるうか？」

「いいの？ シュウ……。」

「まかせとけ。俺の武器は鞭でいい。」

「わかった。もうすぐ着く島で探してみよう」

シュウ……

鞭って言ってもいろいろあるんだけれども……

まあ一番攻撃性に優れているものにしよう。

とか話しているうちにつきまして、

とにかく上陸。

「んじゃあシュウ。行つて来るね。」

「ああ。」

「留守を頼みますぞ」・・・ケン

「敵が来たら叫ぶんだぞ？」・・・シュウ
「倒せる。」

とまあ。

挨拶も終えて
いつこゝ

「早くつきたいんで私たちはね付けて加速する魔法使つからちや
んについてきてね、後早くなれてね」

「は、はい」「

「速い羽 はやいはね 加速 かそくする心 こころ」

「なれたらおいかけてきてね」

「了解」

さ、いきますか。

つきました。

え？時間？
んなもん。

作者の権力で何とかなるワイ！
んで、今、店を探しています。

「どこかなあ？」

「さあ？」

「あ、あこじゃないか？」

え……。

裏路地の一角？

の……。

「世にも不思議な武器」

つて……。

いやいやいや

「「はいつてみよう」「」

興味そそられるやないカーイ

「いえ、危険です

「いざというときは守ってね？」

「「はい。」「」

おお。

「ということで、レッツゴー！」

「「はいなー。」「」

あ、乗ってくれた。

はいりました。おどろおどろしい店に

「きょうは3人買い。」

買い？

え？買わされるの？

もしくは買われるの？
ま、どうでもよくて……。

「私は剣を。」

でっかい両手剣

なんか緑色なんだけど……。

しかも柄の端に緑の玉みたいなのがあるから、たかそう。

「んじゃあ俺はこの銃で、」

両手銃です。なんか小型の銃二丁で、持つところに青色の宝石っぽいものがはまっている。

「わたしは……。」

うーん

鞭もいいけど……棍棒もなーいいよなあ……

あ、でもここは女の子らしく

杖で行きますか。

お、いいのめっけ

なんか刃黒い槍の端に白い玉がついたの

「これとこれとこれください。」

「あいよ。私とゲームでかつたらただでやろう。ただし負けたら10年間ここで働いてもらう。」

「んなゲームならヤリマセン。」

「じゃあ10000000000000000000ベリーはらいな。」

「んなあるかあああああああああああ！……！」

これは・・・ゲームを強制的にやらせたい感じですね
よし。かっても負けてもコッチにメリットがあるようにしましょう。

「んじゃあ。負けたら私とこの国で一番強いものと勝負します。そしてそのものとも負けたら、あなたに忠誠を誓いましょう。どうですか？」

「いいよ」

よし。どうせ私は能力使えば無敵に近いからねw
さて、ゲームの始まりダア！！！！

いざ、勝負！！！！

side シエルティ

「では、ゲームの説明をしよう。」

「はいはい。お願いします。」

ふふふ。

何が来ようたって私は勝つぞ！

なんたって初めに身体能力とかいろいろ5000倍にもらったからね。

当然カンも……

あ、そうでした。カンで迷ったのでした。アラバスタのところにあつ

た城で……

どおしよう；

顔が真っ青になった。

「おい、だいじょうぶか？」

「ボクと変わりましたようか？」

「いい。大丈夫」

たぶんだけど……。

うん。私はできる私はできる。

よし……。

「言っていいかい？」

「おねがいします。」

「ルールは簡単さ、さいころの数字が奇数が偶数かできる。」

「はあ。わかりました。」

「ではやるよ。」

敵は、緑色の湯飲みみたいなものと、さいころ二つを取り出し、おもむろにさいころを手湯飲みに入れ

「さてどっちだ。」

と、言った。

うん。カンで奇数

「奇数。」

「んじゃああたしは偶数だね。答えを見てみようか。」

「奇数だね」

おっしゅ~~~~~

「しゃーないね。私の負けだ。ほら、武器を持っていきな。」

「
「
「
ありがとう。
「
「
「

こうして私のゲームは無事、勝ったのであった。

「おいおい。お前達。」

「なんでしょ?」

「その武器達の名前、知りたくないかい？」

「はい。」

すんごい気になる。

なんなのだろうこの私の黒く美しい刃に赤い大きな薔薇が彫つてある不思議な杖のような刀のようなものは……。

「この薙刀の様なものは、「デスロッド悪魔杖」という。そして、この黒い刃の部分は切ったところから滅びていくから気をつけな。この玉は……しらん。」

わああ。

めっさ危ないやんけ!!

どうしてくれんの？間違えて逝っちゃったらどうすんの？
うひゃ〜

「そしてこの二丁の銃。これは魔力……とか言うものが玉になるらしい。名前は「フェアリー妖精」」

あ、シュウの武器の鞭追加しとこ。

「あの、武器もうひとつ追加したい物があるのですがよろしいですか？」

「うん。ま、いいじゃろ。」

よし。

「ありがとうございます。」

「いやいや。もうこの店は売っちゃったからね、ここにある防具も持っていていいよ。」

「え？……ありがとうございます。」

今ポロリと売ってしまったって言ったよね？

ってことは何？ホントはあんな賭けしなくともただでもらえました

ゝ的な？

いやいや。ありえんな。

ま、もらえたし……

で、シュウの鞭どうしよう……。

いざ、勝負！！！（後書き）

いやゝ

更新遅くなってしまってスイマセンでした。

なんかすげえ

side シエルティ

と、いうわけで

わたしは防具&鞭をさがしています………
ってもなかなか見つかりません

「あの、やっぱり先に武器の説明してください。」

「ええの？」

「はい。聞いた後にじっくり選びます。」

そのほうが気がらくだからね

やっぱり先に聞いたほうがいいよね

ホリースナイプ

「この両手剣は「聖剣」この刀は癒したい相手には癒しを与え、新
で申しいい相手には滅びを与える……まあ使う人によっては悪
魔と化す化け物のような刀じゃな。ま、皆そうじゃガの。」

「……まじですか……。」

「ホントじゃ？」

うっわああ

この武器だけで世界政府倒せるんじゃないの？
ん？

なんか今奥の方からなんか来た

「すみません。奥いつてきていいですか？」

「いいが？」

「ありがとうございます。」

わたしは許可をもらい奥へ進む

「あ……………」

見つけた。

私の防具

見かけはただの私が着ている物と同じ粉雪柄のマントだけど、なんかこうまとうオーラが違う、光り輝いているし、すごく神々しい

「これ、もらっていいですか？」

「これか？でもこれは持ち主を選ぶぞ？」

「いいですよ。」

「失敗したらのろいがかかるぞ？」

「なんかこれは懐かしい感じがするから……大丈夫です。」

「では着てみる？そのマントの上からじゃ、こいつは「天使羽衣」エンジェルフエザー」

マントの辿ってきたものも受け継いでマントそのものになってくれるんじゃない。

「はい。」

この人どこまで知っているんだ？

かえって怖いぞ？

私はなんか複雑な気分になりながらマントを着る

キユイイイイイイイイイン

「おお！成功じゃ。」

「え？」

うーん。

実感ないなあ
ま、いつか

「ハヤテたちは？」
「俺たちは要らない。気に入ったものがないから。」
「そう・・・。」

残念ね
ここではただでもらえるのに
ちっ

「シユウのはどうする？」
「これでよくね？」

ハヤテが持ったのはなんとつかすごいとげとげした先端に毒のオーラを纏っている毒々しいもの

「これは！！よく見つけたのうこれはこの店の中で一番殺傷能力が高い「毒蛇」^{どくへび}じゃ、この鞭で叩かれたものはすべて麻痺し、力の強いものでも三日後に死ぬといわれておる。」
「うわあ。」

ええええ
こんなもんわたすの？
ま、いつか
シユウなら何とかしそうだ。

「これお願いします。」
「あいよ。後これ渡しとくよ。これはビブルカード。この店に来たきゃこれの進む方向にいきな。」

「ありがとうございます。」

さてと、

「帰るよ！」

「「おう！」」

私たちは買い物を済ませシュウの元へ帰った。

なんかすげえ（後書き）

更新遅くなってスイマセンでした。

ミッション

side シエルティ

まあいろんなことがありまして無事私たちの乗っていた船につきま
した。

でもさ

なぜか転生の神の怪我が治っていて・・・
はあ？

「何で転生の神が直ってんの？」

「あの傷って演技だったらしいから。」

「え？」

演技ですとおおお！？

聞いてませんぞ！

「いやいやだましていてごめんよお。」

「ごめんじゃなつての！！！。」

私は散々嘘っぱいのついてるけど体に関しては嘘はついていない
！！主に傷！！

「あ、そうそう。」

「なに？」

私が多少苛ついた声で答える。

「今回の君のミッション。」

「ミッション？なんじゃそりゃ。」

ミッションなんて聞いてないぞ？
大体何のミッションなんだよボケ

「心の声が駄々漏れだぞ。まあいい。まず、君達はここで生きるために君達にかかわらず全員にミッションが与えられる。そのミッションを達成したら次の世界に飛ばされ、また、ミッションを受ける。と、まあこんなかんじだ。」

「で？どんなミッション？」

「この世界のために貢献せよ。」

ミッションの範囲広っ！！！！

「で、どうすればミッション完了？」

「だから、こゝそんなこと聞いてんじゃねえよ。やり方教えろ。」

転生の神の胸倉を掴んで言う。

「えっと……えーっと……本来は死ぬはずだったものを少し長生きさせるとか？」

「それ貢献につながるの？」

「分かん。」

私は問答無用で神様を蹴った。

「私は的確な答えを求めているの。分かる？」

「分かった分かった。んじゃあ一番手っ取り早い方法。」

「なに？」

変なことだったら承知しないからね。

「海賊を全員皆殺しにする。」

「それワンピース終わる！終わっちゃう！！。」

「えー。」

「えー。っじゃない！！。」

「しょうがないな。んじゃあ今のあり方を変える。」

「どうやって？」

「いろいろなことやって……で、『冗談』冗談。」

私がちよつときつい顔で睨んだらあっさり引いた。

「もとの世界にあつたものをはやらせるとか？」

「あ、それいいね。で、例えばどんなもの？」

「車とか……。」

「あるわ！！！」

「じゃあ郷土料理とか？」

「ありそうなんだけど。」

「じゃあ、シャーペンとか？」

「どうやって伝える？」

「……。」

あ、神様黙った。

「そ、そこはじゃなあ、そ、その、自分で考えてくれ。じゃ。」

神様は風のように雲の中に消えた。

「そこは、はぐらかすなああああああ。」

私は空に向かって大声で叫んだ。神様に伝わるように。

ミッション（後書き）

お、遅くなってスイマセンでした。

エピソード

Side
シェ
ル
ティ

ちつ、
転生の神のやつ逃げやがった。

「で、どうするんですか？」

問題はそこなんだろうね。

「ま、とりあえず私たちが賞金首になつて将来自殺するとか？もしくは麦わらか遺族団に殺されたつてのも良いね。」

「……か遺族団じゃなくて海族団だ。」

冷静に直されたよ。

「とりあえず私は賞金首だし、もう人がいなくなつて誰もすまなくなつて獣もすんでいない島に行つて、派手にこの世から消した後に私のちからで、もとに戻すつてのも良いよね。うん。そうしよう。」

てなかんじで、まあそんな感じのところいいって派手に消し、私たちが使命を全うしたわけですよ。

・ ・ ・ なんて、なんて、なんてだ！！！！

使命がおわたのちがうせかいにいかないいいいいいいいいいい
 いいいい！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！

ま、そんなかんじの私達。こんなんでも、少しは成長したかな？

エピソード（後書き）

こんなんで終わってしまいましたができれば続編ぐらかきたいな
くと思っておりますので・・・え？もう書くなつて？そんなこと
いわないで（TOT）

では、またいつか会えることを楽しみにしています！さよなら！！！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3234n/>

ONE PIECEの世界で生きて行きます！！

2011年3月19日21時51分発行